

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

日本における家庭婦人スポーツの可能性

－ママさんバレーボールの事例から－

2019 年 1 月

氏 名：南部日菜子

学籍番号：201510393

指導教員：関根久雄教授

目次

第1章 序論	1
1. 研究の目的	1
2. 研究方法と章構成	3
第2章 家庭婦人スポーツに関する先行研究	5
1. 家庭婦人スポーツの成り立ち	5
(1) コミュニティ・スポーツ振興政策	5
(2) フェミニズムの波と主婦たちの意識の変化	6
2. ママさんバレーボールの現在までの変遷とその特性	7
3. 家庭婦人スポーツの意義・役割に関する先行研究	9
(1) ママさんバレーボールと社会との関係性	10
(2) 「遊び」理論、「女縁」理論との比較	11
(3) 生涯スポーツとしてのママさんバレーボールの検討	12
(4) 育児期女性のスポーツ参加についての研究	12
(5) 先行研究のまとめ	12
第3章 スポーツの効果に関する先行研究	14
1. スポーツが持つ4つの教育的効果	14
2. 地域活性化に対するスポーツの社会的効果とソーシャル・キャピタル論	16
3. スポーツ経験の教育的価値と社会的価値	19
4. 先行研究のまとめおよび他の主婦コミュニティとの比較	21
第4章 ママさんバレーボール参加者への調査	23
1. 調査方法	23
(1) 調査協力チームおよび調査対象者の概要	23
(2) 調査方法と研究課題	25
2. 調査結果の分析方法	26
3. ママさんバレーボールの競技特性	27
4. 生活の中のママさんバレーボール	31
5. コミュニティとしてのママさんバレーボール	37
6. 家族とママさんバレーボールの関わり	49

7. ママさんバレーボール以外のコミュニティ	55
第5章 結論	59
1. ママさんバレーボールへの参加による家事の改善	59
2. 主婦の自由時間に対する家族の理解	60
3. スポーツを通じたコミュニティの特性	61
4. 調査対象の2つのチームの相違点	63
5. まとめにかえて	64
注	66
参考文献	68
Summary	71
謝辞	73

表目次

表 1 : スポーツを通じた地域活性化施策の分類	16
表 2 : インタビュー調査協力チームの概要	23
表 3 : インタビュー対象者一覧	24

第1章 序論

1. 研究の目的

平成 24 年 3 月、文部科学省は「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」を目指して、ライフステージに応じたスポーツ活動推進を含む⁽¹⁾スポーツ基本計画を策定した。主な参加者が主婦である「家庭婦人スポーツ」は、世界でも他に類をみない日本独自のスポーツ形態であり、女性のライフステージに応じたスポーツ活動を下支えしてきた。最も歴史があり認知度も高いと思われるバレーボールをはじめ、テニスや卓球、バスケットボール、サッカー、ソフトボールなどいくつもの競技が存在し、今なお、全国規模の大会が開催されている。家庭婦人スポーツが誕生した背景には、日本で長年支持されていた「夫が外で働き、妻は家を守るべき」という固定性別役割分担意識が 1970 年代の世界的なフェミニズムの波によって崩れ始めたこと、高度経済成長に起因する地方の過疎化に対するコミュニティ・スポーツが振興したことで、各地の体育施設が建設され、主婦たちにスポーツ空間が提供されたことなどがある [高岡 2008:396-398]。このように家庭婦人スポーツの誕生は当時の社会状況と密接に関係し、また主婦のイメージやエンパワーメントにも大きな影響を与えてきた。

家庭婦人スポーツの中でも最も参加者が多く、大会数や大会規模も他の種目と比べて群を抜いているママさんバレーボールは、家庭婦人スポーツの中で最初に誕生し、その先駆的存在である。そのママさんバレーボールは、1964 年の東京オリンピックが機運となって開始している。内海によると、当時の日本国内の女子バレーボールは非常に人気が高く、「東洋の魔女」として知られていた日本代表チームが優勝したことで主婦のバレーボールへの参加欲求が高まり、学校の PTA などでも母親たちがバレーボールを始めたことがきっかけだという [内海 2001:115]。バレーボールはルールも比較的容易で馴染みのあるスポーツであるため初心者でも参加しやすく、またネットとボールがあればすぐできるという特徴によって、学校の体育館で気軽にできるスポーツとして主婦たちの間で広まった。

現代の日本の社会状況を見てみると、急速に進む少子化が根深い社会問題となっている。日本の生産年齢人口は、1995 年をピークに減少しており、総人口も 2008 年を

ピークに減少している。2015 年の生産年齢人口（15 歳～64 歳）は 7,620 万人であり、今後急激に減少すると予想される⁽²⁾。内閣府の『平成 29 年版少子化社会対策白書』によると、2015 年の合計特殊出生率は 1.45 で、史上最低を記録した 2005 年の 1.26 に比べ増加しているものの、深刻な少子化に歯止めをかけられないでいる⁽³⁾。出生率低下の主な要因を見てみると、晩婚化の進行等による未婚率の上昇が挙げられ、さらにその背景には仕事と子育ての両立の負担感や子育て負担感の増大があるとされている⁽⁴⁾。また、子育てや家事へのサポートを得られない場合、女性の生活の質（QOL）は低くなる傾向にある[中山ほか 2015:75]。以前の日本では親子 3 代の家庭が一般的で、子育てや家事についての知識を得ることや実際に手伝ってもらおうといったサポートを受けやすい環境であったが、核家族化が進み家族構成が変化している現代においては、女性がこのようなサポートを受けることが難しくなっていると想定される。

こうした中、通常であれば、女性のスポーツ参加率が低下すると容易に想像される。しかし、実際には 1962 年以降の 30 年間で日本人のスポーツ参加率が増加し続けており、特に女性のスポーツ参加率が主婦を中心に倍増している[林・湊 1994:61]。主婦のスポーツ活動への参加動機を調査した研究によると、これまでの動向では、スポーツ活動を通して友人作りや地域での情報交換などを実践していることがわかっている[林・湊 1994:76]。また、高橋美波によるママさんバレーボールの人類学的研究に関する論文では、ママさんバレーボールに参加するメンバーが、年齢にばらつきがあるにも関わらず、互いにあだ名やファーストネームで呼び合う様子が刻銘に記されており、練習後には旅行のお土産や持ち寄ったお菓子などを広げてお茶会を行い、主に子どもや家庭の話を中心とした雑談や夕食に関する情報交換が行われる様子が記述されている[高橋 2012:66-70]。筆者は、主婦が家庭や職場以外に所属する家庭婦人スポーツ活動というコミュニティで子育てや家事についての相談や情報交換などのサポートが行われることから家庭婦人や一般女性の抱える課題が改善されるなど、女性にとって有効なコミュニティになっているのではないかと考える。

そこで本稿では、家庭婦人スポーツの中でも最も参加者が多く馴染みの深いママさんバレーボールを事例として取り上げ、その参加者へのインタビュー調査結果を分析することで、家庭婦人スポーツの現代の日本社会における意義について明らかにすることを目的とする。また、女性が家庭や職場以外に所属するコミュニティには様々な種類や体系が存在するが、家庭婦人スポーツにおいてはスポーツが持つとされる社会

的役割が機能し、他のものとは異なる性質を持っていると考えられる。その点についても分析を通して明らかにしたい。

なお、家庭婦人スポーツあるいはママさんバレーボールに関する研究は、皆無ではないものの十分であるとは言い難い。当該領域では、家庭婦人スポーツ誕生当時の社会関係について論述したものや、ママさんバレーボールへの参加動機に関する考察などが主であり、家庭婦人スポーツあるいはママさんバレーボール参加者が実際にその活動を通して何を感じ、獲得しているのかについて具体的に述べている論文は少ない。これらの点を踏まえると、共働きの核家族が多い現在の時代状況において、実際に家庭婦人スポーツ活動に参加している女性への調査を行い、家庭婦人スポーツの意義を考察することは非常に有益である。既存の論文の多くは、家庭婦人スポーツあるいはママさんバレーボールの比較的積極的な側面についての記述が見受けられる。例えば、ママさんバレーボールはその誕生時に日本社会が抱えていた課題に対する方策として作り出され、その役割を果たしていた[高岡 2010:536]というものや、ママさんバレーボールの活動を継続することで生き甲斐が得られる[林・湊 1994:72]、といったものがある。本稿では積極的側面のみではなく、消極的な側面についても考察の対象としていきたい。

2. 研究方法と章構成

研究においては、まず家庭婦人スポーツの制度的特性と社会の関係に関する研究、家庭婦人スポーツの参加動機に関する研究、女性学、スポーツ社会学といった分野の文献、学術論文や、一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟の Web サイト等を参照する。次に、2018 年 11 月から 12 月にかけて筆者が行った、ママさんバレーボールチームのメンバーへのインタビュー調査で得られたデータも活用する。インタビュー調査は、茨城県つくば市のママさんバレーボールチームと、埼玉県さいたま市のママさんバレーボールチームの計 2 チーム合計 19 人の既婚女性に対して行った。

以下に、本稿の章構成を述べる。第 1 章では本研究の目的と研究方法について記述した。第 2 章では様々な社会的な要因が絡み合って発生・普及した家庭婦人スポーツの成り立ち、ママさんバレーボールの現在までの変遷とその制度的・競技的特性について記述した後、家庭婦人スポーツの意義・役割について先行研究でどのように調査されているかをまとめ、本研究の新規性を検討する。第 3 章では、スポーツが持つ社

会的機能について先行研究を用いて整理する。その際、華道や書道、料理教室などの文化活動の習い事、あるいは幼稚園・保育園・学校などにおける PTA 活動を通して形成された友人など、様々な主婦のコミュニティとの差異について考察し、家庭婦人スポーツ独自の性質を発見することを目的とする。そして第 4 章では、本調査のインタビュー対象であるママさんバレーボール 2 チームの概要と、先行研究を踏まえて筆者が導き出した 3 つの研究課題について述べた後、インタビュー調査の結果について考察する。最後に、第 5 章では研究課題についての答えを示した上で、全ての章を踏まえて現代の日本における家庭婦人スポーツの可能性についてまとめ、結論とする。

第2章 家庭婦人スポーツに関する先行研究

本章では、社会状況を踏まえながら家庭婦人スポーツの成り立ち、ママさんバレーボールの変遷と特性を整理し、先行研究の検討を深めながら家庭婦人スポーツが参加者である主婦あるいは社会にとってどのような意義・役割を持っていたのかについて整理する。

1. 家庭婦人スポーツの成り立ち

(1) コミュニティ・スポーツ振興政策

かつて日本におけるスポーツは学生によって主体的に行われていたが、現在に至っては大きく様変わりし、スポーツは決して学校に限定されるものではなくなっている。なお、日本の体育は、「学校体育」と「社会体育」の2つに分類され、社会体育とほぼ同義、すなわち市町村における地域住民のためのスポーツという意味で頻繁に用いられるのが「コミュニティ・スポーツ」という言葉である[三好 1991:5,8-9]。高度経済成長期の日本において政府は、1973年の「社会経済基本計画」に基づき、学校外の社会体育施設の数的大幅を増やし、それらの施設を利用した行政主体のスポーツ教室を開催するなどコミュニティ・スポーツの振興を図った[高岡 2008:397]。このコミュニティ・スポーツ振興政策が、家庭婦人スポーツの誕生とその拡大を促進した大きな要因となっている。

この振興政策が実施された背景には当時の日本社会で問われた地域社会における共同体意識の希薄化という社会問題が関係している。1950年代半ばから1970年代初頭にかけて起こった高度経済成長は人口の流動を激化させ、地方の過疎化と都市の過密化という新たな社会課題を生み出した。1930年頃には25%にも満たなかった都市部の人口割合が、1955年に56%、1965年に68%、1975年には76%と急増した。このように、高度経済成長に伴った産業構造の変化による人口流動や都市的なライフスタイルが普及するなど社会が急激に変化すると、資本主義以前の社会に存在していた地域社会の共同体意識が薄れ、地域的連帯感は崩壊した[高橋 1991:20-21]。

政府によるコミュニティ・スポーツ振興政策としてスポーツは、こうしたコミュニティの崩壊し始めた地域社会と共同体意識を再構築するための手段として、スポーツ

の持つ連帯性の形成といった社会的価値を利用しようとしたことに特徴がある。新井野によると、コミュニティ・スポーツという言葉が政策関連の文書に明確に登場したのは、1973年に経済企画庁が発表した『社会経済基本計画―活力ある社会福祉のために―』であるという。またこの文書の中では、スポーツ活動は「日本経済の高度経済成長の中で失われてきたふるさととしての地域社会を再建し、人びとの心のよりどころや連帯感を生み出す生活の場としてのコミュニティを取り戻し、国民の余暇時間の増大に対応するもの」[新井野 2014:7]として意義づけられている。

そして、その政策によって大幅に増設された体育施設や自治体が実施したスポーツ教室は主婦たちにスポーツをする場と機会を与え、そこから主婦たちによるスポーツのチームができていった。このように、崩壊した地域社会の再編のためのコミュニティ・スポーツの振興政策が、家庭婦人スポーツの誕生に寄与したと言われている[高岡 2008:398]。

(2) フェミニズムの波と主婦たちの意識の変化

家庭婦人スポーツが拡大していったもう1つの背景として、主婦たちの日常からの解放欲求とその解放を抑制する固定性別役割分担意識という社会規範の、世界的なフェミニズムの波による緩和が関係している。

第一次世界大戦以前の日本では、農家や自営業を中心とする労働形態で居住地と職場が同一であり、夫も妻も子どもたちもそこで暮らし、働くというのが一般的であった。しかし第一次世界大戦後の好況で産業化が急速に進展したことにより、賃金労働者、いわゆるサラリーマンが大量に生み出され、彼らは郊外の新興住宅地に住み、新しく敷設された電車に乗って通勤した。これによって職場と家庭という公私の分離が起こり、妻は夫が職場に行っている間に留守を守る「おくさん」と呼ばれて家に留まるようになった。第一次世界大戦後の産業構造の転換による職場と家庭の分離、夫と妻の役割分担意識はその後も進展していき、日本における固定性別役割分担意識、つまり夫が外に出て働き妻は家を守るべき、という意識が浸透していった[落合 2004:22,45]。

画一化された主婦像が浸透していく一方、他方では家事の合理化も進んだ。1963年の労働省婦人少年局の報告によると、加工食品やインスタント食品の普及、既製の購入増大、電気洗濯機や掃除機、電気釜、冷蔵庫などの電化製品の普及が進んだ。ま

た幼稚園や保育所などの施設も普及し、主婦の家事育児が軽減された。そしてこのような家事の合理化は、主婦の余暇時間の増大に役立った[労働省婦人少年局 1963:34]。

そのような社会状況の中、長年日本に浸透していた固定性別役割分担意識はアメリカにおけるウーマンリブから派生し、1960年代末から始まった第2波フェミニズム⁽⁵⁾の波によって揺らいだ。落合によると、アメリカでは戦争中に兵士となった男性たちの代わりに、女性たちが様々な職業に就いて働いていたが、戦争が終わって男性たちが帰還すると、女性たちは男性たちに追い出されるようにして家庭に入ってしまったということがあった。そのため、第2波フェミニズムの波は「女は家庭に」という概念への反発の現れであったと言う[落合 2004:139]。この影響を受けて日本は、1975年に国連総会で採択された女子差別撤廃条約を1985年に締結し[高岡 2008:396]、同年に男女雇用機会均等法が制定された。第2波フェミニズムの波の前後で、固定性別役割分担意識を支持する割合の変化を見てみると1972年10月の意識調査では「賛成」および「どちらかといえば賛成」と回答した人の割合が男性は84%、女性は83%であった[内閣総理大臣官房広報室 1973:112]。これに対し1984年5月の意識調査では、固定性別役割分担意識について「同感する」と回答した人の割合が男性は62.7%、女性は49.2%と大幅に減少していた[内閣総理大臣官房広報室 1984:24]。

このように、家事の合理化による余暇時間の増大と第2波フェミニズムの波によって固定性別役割分担意識が崩れ始め、主婦たちの日常からの解放欲求が高まり、その手段としてスポーツなどの家庭外の活動が人気を集め、家庭婦人スポーツ誕生の一端を担ったのである。

2. ママさんバレーボールの現在までの変遷とその特性

家庭婦人スポーツの中で最初に誕生し、その先駆者的存在とも言えるママさんバレーボール誕生の背景には東京オリンピックにおける女子日本代表チームのメダル獲得に加え、体育科教育と部活動という戦後の学校体育におけるバレーボールの学習経験が増大したこともある。当初は同じ小学校の校内という小さなコミュニティで行っていたママさんバレーボールが次第に校外対抗戦へと発展し、大会規模も地域から県単位へと発展していった。こうした影響を受けて、日本バレーボール協会と朝日新聞社が主催者として立ち上がり、文部省をはじめとする体育関連組織や協賛企業の援助を通じて、1970年に第1回全国家庭婦人バレーボール大会を開催した[内海 2001:115-

116]。第 1 回大会に構想の段階から関与していた準備委員会のメンバーは男性のみで構成されていたが、次第に女性委員も加わり女性の公式審判員も登場し、現在では全国ママさんバレーボール連盟が開催する試合はすべて女性だけで運営されるようになった⁽⁶⁾。それまで男性の役割とされてきた運営に女性が大きく関与するようになったことで、スポーツにおいても女性の活躍できる場が広がった。こうしたスポーツにおける女性の社会参加機会の増大は、主婦たちが社会とのつながりを得るきっかけとなり、主婦たちの社会化を促した[高岡 2008:397,400]。ここで述べる「社会化」とは、家庭に活動の場を限定されていた主婦たちが、大会の準備委員会という場を与えられたことで、社会に組み込まれていった現象を指している。また、内海はママさんバレーボールの世界における評価について以下のように記述している。

家庭婦人を対象とするスポーツ大会は世界でも珍しく、また、オリンピック開催をきっかけとしたバレーボールブームから誕生したこともあり、ブランデー IOC 会長⁽⁷⁾も「オリンピックムーブメントの生きた見本」として称賛した。世界バレーボール連盟も、世界唯一のこの大会を注目している[内海 2001:116]。

ママさんバレーボールは、全国大会が初めて開催された 1970 年から加速度的に拡大した。第 1 回大会では 855 チームであった地区予選の参加チーム数は、10 年後の 1979 年には 6 倍の 5,230 チームに膨れ上がり、その後も増加し続け 1995 年には、6,740 チームが地区予選に参加した[内海 2001:118,120]ことがわかっている。

ママさんバレーボールには、そのルールなどの制度面と競技面において他のスポーツ活動とは異なる特性が見られる。開始当初の全国大会は、優勝を競う目的に限定されておらず、交流や楽しむことを最大の目的として開催されている。そのため 1 つの優勝チームを作らずに、参加チームを 4 つのグループに分け、グループ毎の優秀チームを選び、4 つの優秀チームの中から平均年齢の最も高いチームに総理大臣賞を与えていた。しかし第 15 回から 4 つの優秀チームによるトーナメントを総理大臣杯と呼び、その優勝チームに総理大臣賞を与えるようになるなど、大幅に改定されたことにより、「交流や楽しむことが目的であったはずのママさんバレーボールの競技性が高度化してしまう」課題が問題視され始めた[内海 2001:116-117]。

こうした課題が起きる一方、他方ではバレーボールの技術レベルを差異化して参加者を選別し、なるべく多くの人に全国大会に参加してもらうためのルールも出来上がっている。本来は 25 歳以上の既婚女性に与えられる出場資格であったが、ルール改訂後には、過去に国体やインターハイなどの全国レベルの競技大会に出場した経験がある場合は 35 歳以上に、V リーグ・V1 リーグ⁽⁸⁾に出場した経験がある場合は 50 歳以上に限定されるようになった。同様の理由により、全国ママさんバレーボール大会においては、一度出場した選手が再度プレーヤーとして同大会に出場することが許可されていない。ママさんバレーボールの全国大会は、ほかにも 50 歳以上、60 歳以上と年齢制限を設けている「いそじ大会」、「ことぶき大会」、また「全国ママさんバレーボール冬季大会」などいくつかの種類があり、それぞれで参加資格が異なるため、生涯にわたってママさんバレーボールを継続できる仕組みが形成されている。さらに全国大会に出場するためのチームのメンバーも、同一区・群・市内に限定するなど⁽⁹⁾、競技スポーツにみられるスカウトを無効化する制度も設けられている。

競技特性について考えると、元々バレーボールは元来、レクリエーションスポーツとして普及したという背景がある。バレーボールは 1985 年にアメリカのマサチューセッツ州において、年齢や性別を問わず楽しめるスポーツとして考案されている。相手チームとネットを挟んで競技するため身体接触が少なく安全で、かつ一度に大人数で試合をすることができる特徴がある。なお、ママさんバレーボールの大会では、9 人制バレーボールのルールが採用されており、よりレクリエーション的な要素を残している。9 人制バレーボールは、6 人制のルールといくつかの点で異なっている。例えば、6 人制バレーボールではポジションのローテーションを行うが、9 人制ではそれを行わない。9 人の選手がそれぞれの役割を分担し、その役割に徹するため、身長の高低にかかわらず活躍することができ、より多くの人に参加する機会を提供できる[大原 2014:60-61]。このような競技的な特性も、ママさんバレーボールを考察する上で重要な視点であると感じられる。

3. 家庭婦人スポーツの意義・役割に関する先行研究

家庭婦人スポーツあるいはママさんバレーボールについての先行研究は決して多くはないが、その意義・役割については、既にいくつかの検討が行われている。

(1) ママさんバレーボールと社会との関係性

高岡は、ママさんバレーボールの発展過程と制度的特性を、その誕生時の社会状況と絡めて論じており、家庭婦人スポーツの活動は『主婦性』の再生産装置として機能するよう社会的に構築されたものであった」[高岡 2008:394]と述べている。高岡は「主婦性」の意味を「既婚女性が家庭の任務のほとんどの責任を持ってその任務を遂行している状態」、その再生産とは「主婦性」が不断に反復・更新・生産されることと定義する[高岡 2008:392]。固定性別役割分担意識によってそれまで家を守る役割を持っていた主婦たちにとって、家庭婦人スポーツは閉塞感や日常性からの解放の場ではあったが、それによって得られた活力感によって再び主婦としての役割を全うしていくという、解放と再生産の循環構造が出来上がっていった。そしてこの循環は、家庭婦人スポーツが誕生・発展した 1970 年代における「地域の疲弊化」と「高度経済成長の維持」という課題に対する解決策の一旦を担った。つまり、解放された主婦たちの生活圏内における継続的なバレーボール活動が地域の活性化の一助となり、主婦性の再生産によって夫を良質な労働力を世に送り出す一助になっていたと換言される[高岡 2008:392,404,405]。

また、主婦性の再生産は主婦たちが意識的に行っていたというよりも、むしろ社会的な意図に基づいて導かれた無意識の行為だと見て取れる。ママさんバレーボールの全国大会が初めて開催されたのは 1970 年であるが、全国大会へ進むチームを決定する県予選の開催促進や各地におけるママさんバレーボールの普及活動などは、全国大会の「主宰者機構」によって行われていた。従って、ママさんバレーボールは「主宰者機構によって供給され、参与者で活動の具体的な場である自治体、PTA、婦人会などの地域組織を通して、それを需要するという構造」[高岡 2010:527]だと考えられる。ここでの「主宰者機構」とは全国大会の準備委員会に参加するなどして深くママさんバレーボールに関与していた、日本バレーボール協会、朝日新聞社、文部省、協賛企業のブラザー工業株式会社、株式会社ヤクルト本社のことを指す。高岡は、この「主宰者機構」が主婦性の再生産の循環構造を供与したと示唆する。つまり、主宰者機構のそれぞれのセクターは、各々の利害状況を背景にしてママさんバレーボールの事業展開に関与し、それらの利害を実現するには大会参加者が「主婦」であることが強く望まれたために、意図的な意識があったとは言えないが、結果的にママさんバレーボールの制度化において主婦性の再生産の循環構造を構築していったというのである。

そして社会と参与者である主婦との関係について「相互作用的な協働関係が成立していた」と結論づけている[高岡 2010: 527,528,536]。

(2) 「遊び」理論、「女縁」理論との比較

高橋美波は、仙台のあるママさんバレーボールチームを参与観察によって調査し、フランスの社会学者・哲学者であるロジェ・カイヨワの「遊び」理論、日本のフェミニスト・社会学者である上野千鶴子の「女縁」理論と比較することで、主婦の集団による活動の現状と意味について検討した[高橋 2012:63]。

カイヨワは「遊び」について「強制されない自由な行為であること」、「明確な空間と時間の範囲内に制限されていること」、「展開や結果が未確定であること」、「非生産的であること」、「規則があり共同体規範を作り出すこと」、「日常生活から離れた虚構の活動であること」という6つの基本的な定義を提示している[カイヨワ 1990:31,40]。

上野が定義した「女縁」とは、女性たちが職場でも家庭でもない場所に自ら出歩く先を作り、そこで形成された選択性の高い人間関係の集団のことである[上野ほか 1988:22]。「女縁」は地縁・血縁・社縁とは異なる「選択縁」であり、選択縁の集団の中では女性は誰かの妻や母ではなく、個人の名前で登場する。またその中で、夫や子どものことを話すのはかえってタブーだという[上野 2008:9-10]。

高橋美波は、調査したチームにおいて練習中でも育児に励むメンバーがいたことや、夕食や家族などの現実の話をすることを挙げ、ママさんバレーボールの活動をカイヨワの「遊び」とも、上野の「女縁」とも異なると述べた。そしてママさんバレーボールの活動を通して、子どもに学校の友達とは違う友達ができることや、メンバーからおさぎりの品をもらうこと、同じ主婦である女性たちと様々な会話ができることなど、妻や母であるからこそできることも多いとした上で、ママさんバレーボールは「主婦としての居場所とアイデンティティを女性たちに提供している」と結論付けた[高橋 2012:74-75]。

このような高橋美波の議論に関連して、女性スポーツの社会学について研究した江刺は、主婦のスポーツ活動について、子どもを媒介したPTAの活動としてのスポーツ参加は「現代日本における既婚女性のスポーツ参加にとって無視しえない重要な要因となっている」[江刺 1992:271]と述べ、女性のスポーツ参加にとって母親という役割が抑制要因でもありつつ、強力な促進要因ともなり得ることについて言及している。

(3) 生涯スポーツとしてのママさんバレーボールの検討

大原は文部科学省が 2000 年に策定したスポーツ基本計画や 2010 年に発表されたスポーツ立国戦略において、総合型地域スポーツクラブを拠点とした生涯スポーツ社会の実現・地域でのコミュニティ形成の方策が打ち出されたことに触れ、それを実現させるための総合型地域スポーツクラブとしてのママさんバレーボールを検討した[大原 2014:59-60]。大原によると、ママさんバレーボールはレクリエーションスポーツの要素と競技性が共存しており、多くの参加者がいつまでも参加できるように工夫されていることから、生涯にわたってスポーツができる環境でありコミュニティ形成にも寄与している活動であると言える。一方で、時代の変化とともに「楽しむ」ことや「健康の保持・増進」というママさんバレーボールの本来の目的が「勝つこと」に変わってきており、大原はその競技性が変化した可能性を指摘した [大原 2014:62-63]。

(4) 育児期女性のスポーツ参加についての研究

既婚女性のスポーツ参加を妨げる主な要因としては、仕事や家事、育児による時間不足や自分より家庭のことを優先することが考えられる。中山らは、特徴的なライフステージである「育児期女性」（未就学の子どもの抱えている女性）に着目して、その全国的な運動・スポーツ実施の状況を把握し促進させる方策を提示するためにアンケートによる量的調査を行った。調査結果によると、育児期女性の運動実施頻度は非育児期女性よりも有意に低く、運動実施への関心がない無関心期と、運動実施への関心はあるが実施に至っていない関心期を合わせた割合、つまりスポーツができていない育児期女性の割合は全体の 76%にも及んだ。また育児期女性において仕事の有無や就業形態は、運動の阻害要因に影響を及ぼさないこともわかった。そして、夫や夫以外による育児への協力が得られない場合、育児期女性の運動実施割合は低くなり運動への無関心期の割合が高まること、生活の満足感や生活意欲などの QOL (Quality of Life) が低くなるという結果が出ている[中山ほか 2015:68-75]。

(5) 先行研究のまとめ

以上のように、家庭婦人スポーツは様々な視点で研究されているが、どの文脈でも家庭婦人スポーツには、何らかの社会的役割や意義が存在していると述べられている。

高岡はママさんバレーボールを「主婦性の再生産装置」として捉え、大原は「生涯スポーツ」としてのママさんバレーボールについて考察した。両者の研究に共通している点は、最終的に日本社会の中でママさんバレーボールがどのような役割を持っているのか、あるいは持ち得るのかという視点で論じている点である。しかし「家庭婦人がスポーツをするコミュニティ」という切り口で述べられた論文は管見の限りではあるが確認できていない。そこで本稿では、それが参加者の女性たちにどのような作用を及ぼしているのか、どのような存在であるのか、その可能性について考察したい。なお本稿では、カイヨワの「遊び」理論および上野の「女縁」理論とママさんバレーボールを比較し、その活動が参加者である主婦にとってどのような意義を持つのかということを論じた高橋美波の研究に立脚し、その研究方法論を用いたい。但し、研究期間の課題から本研究では、参与観察の代わりにインタビュー調査を用いることとする。また、中山らの研究が示しているように、育児期の女性は夫や夫以外の育児への協力が得られないとスポーツ参加が難しい状況にあることから、育児期女性のスポーツの実施と、家族のサポートは切り離すことのできない関係だという立場を採る。なお、本研究のインタビュー調査の対象者は、多様な背景を持つ女性がいたことなどから未就学の子どもを抱える女性に限定しておらず、中山らが定義した「育児期女性」とは異なる。ただし、既婚女性のスポーツ実施と家族のサポートは強い関連があると考えられるため、家庭婦人スポーツとその参加者の家族との関係についても考察したい。

第3章 スポーツの効果に関する先行研究

ここまで、家庭婦人スポーツというスポーツを通した主婦のコミュニティについて、その成り立ちや特性、先行研究について述べてきた。しかし、主婦が集まるコミュニティは、スポーツに限定されているものではない。華道や書道、料理教室などの文化活動の習い事、あるいは子どもの幼稚園・保育園・学校などにおけるPTA活動など、様々な種類である。では、そのような多様な主婦のコミュニティの中で「スポーツを通した集まり」にはどのような特性があるのだろうか。本章では、その特徴を明確にするために、スポーツにはどのような効果が備わっているかということについて、教育的効果と社会的効果に焦点を当て、筆者が昨年執筆した独立論文や先行研究を用いて整理する。

1. スポーツが持つ4つの教育的効果

近年、発展途上国などにおける開発の現場で、スポーツを用いたプロジェクトが注目をあびるようになってきている。それはスポーツがいくつかの教育的効果を持ち、それらが開発プロジェクトに有効であると考えられているからである。筆者は、昨年「スポーツを通じた犯罪抑止へのアプローチ」という題目で独立論文を執筆し、アメリカのインナーシティにおいて青少年の犯罪率を減少させた「Midnight Basketball」の事例を取り上げ、スポーツの教育的効果を用いた犯罪抑止活動について考察した。本節では独立論文で扱った、開発の文脈におけるスポーツの教育的効果について述べる。

小倉（2014）はスポーツの教育的効果を、それが及ぶ範囲によって「エンパワーメント（EMPOWERMENT）」、「ソシアリゼーション（SOCIALIZATION）」、「コミュニティ・ビルディング（COMMUNITY BUILDING）」、「ネーション・ビルディング（NATION BUILDING）」の4つに分類している。

エンパワーメントとは、スポーツの教育的効果を個人の枠組みで捉えたものである。エンパワーメントとしてのスポーツの機能を考えた際にまず挙げられるのが肉体的なものであり、例えばスポーツをすることで健康を維持する、体力を強化する、免疫を付ける、といったことがある。さらに、決められたルールの中でプレーするというスポーツの特性には「ルールに沿って行動する」ということを教育する効果があると言

える。スポーツを通じて個人個人が精神的にも健康で健全な人格に育っていき、リーダーシップやチームスピリットを養うといった積極的側面が「エンパワーメント」というスポーツの教育的効果である。

ソシアリゼーションとは個人から拡大させた社会全体の枠組みでスポーツを捉えたもので、個人を社会化すること、社会参加や同化の過程である。開発の現場におけるスポーツを用いた社会政策の中には、女性や障害者をプログラムの参加者に設定しているものも多く、そこでは女性や障害者へのスポーツの振興だけではなく彼らの社会進出やコミュニティ活動への参加促進が目指されている。

コミュニティ・ビルディングは個人を包括する地域（コミュニティ）全体の枠組みでスポーツを捉えたもので、共同体としての組織や意識の強化のことである。コミュニティベースのスポーツの振興事業では、スポーツの普及を通じて人々の共同体への帰属意識が高まり、それがさらにそのコミュニティにおける開発活動や政策の促進にプラスに働くと考えられる。

ネイション・ビルディングは、コミュニティ・ビルディングを地域から国のレベルに拡大したものである。例えば、国際的競技大会での自国のスポーツ選手の活躍を目のあたりにすることで、国家意識や民族意識が高揚するといったことがこれに当たる [小倉 2004:158-160]。

以上のように、スポーツが持つ教育的効果はそれが及ぶ範囲によって分類されている。第1章第1節で述べたように、ママさんバレーボール活動において子育てや家事についての相談や情報交換などのサポートが行われることで、その参与者である主婦たちが抱える課題が改善されるということがあれば、彼女たちの主婦としての能力を向上させるという意味でエンパワーメントの効果が発揮されていると言える。また、第2章で述べたように、ママさんバレーボールにおいても活動参加や運営に携わることでそのものが主婦の社会参加の機会と捉えられていた。ここでは、小倉が提示している4つのスポーツの教育的効果のうち、ソシアリゼーションの効果が合致する。さらに、人々はスポーツそれ自体を通して、同じ状況の中にいる人々、つまり一緒にスポーツを行っている人々が互いに競い合うだけでなく、共に興味関心、楽しさ、経験を共有し、友情を築く [Schinke, Hanrahan 2012:2]ことから、コミュニティ・ビルディングの効果も発揮している。ママさんバレーボールの各クラブで、バレーボールを通して他の参与者と楽しさや経験を共有し、そのチームへの帰属意識を高め地域でのコミ

ユニティを形成することは、結果としてネイション・ビルディングにも直結すると考えられる。このように、小倉が説明しているスポーツの4つの教育的効果は、ママさんバレーボールを始めとする家庭婦人スポーツも同様だと感じられる。

2. 地域活性化に対するスポーツの社会的効果とソーシャル・キャピタル論

第2章第1節において、家庭婦人スポーツが台頭した背景には政府によるコミュニティ・スポーツの振興政策が存在すると述べた。こうした、スポーツを通して住民の連帯感を生み出し地域の活性化を図る取り組みは、現在に至るまで数多く存在し、「スポーツの社会的効果」に期待が寄せられている。では、その「スポーツの社会的効果」とは何であるのだろうか。

先述の「社会的効果」とは社会自体が「人間間の諸関係」と社会学の中で定義されていることから非常に曖昧な表現である。また経済的効果と異なり数値などで算出することが非常に難しく、目に見える形で感じるものが困難であることも理由の1つである。また、こうした無形なスポーツの社会的効果を、「そのスポーツ活動に参加する人々やコミュニティにもたらされる影響・効果」と定義している[木田・岩住 2007:117]。本研究では、この定義に立脚し、この定義に従って現象を説明する。

スポーツを通じた地域活性化施策では、そこで用いるスポーツの形態によって直接的にスポーツを活用するタイプと間接的にスポーツを活用するタイプの2つに分類され、それを地域との関わりからさらに7つに分類すると、以下の表1ようになる。

表 1：スポーツを通じた地域活性化施策の分類

直接的にスポーツを活用するタイプ	間接的にスポーツを活用するタイプ
プレー型： スポーツを「行う」	スポーツリゾート型： 自然資源等を活用するタイプ 1
ホームタウン型： スポーツを「観る」・試合等を直接観る	キャンプ・合宿型： 自然資源等を活用するタイプ 2
イベント型： スポーツイベントを開催	スポーツ関連産業型： 産業資源として活用するタイプ
支援型： スポーツを直接「支援する」	

([御園・木田 2007:63]より筆者作成。)

本稿では、家庭婦人スポーツの参与者である主婦、つまり実際にスポーツを「行っている」人々を対象として調査を行っているため、「プレー型」に関する先行研究を掘り下げ、そこで提示される社会的効果を再考する。

御園・木田によると、プレー型において地域住民がスポーツを行うことは、充実した自由時間の実現や健康増進などに効果があり、地域で行われるスポーツイベントなどに住民が参加することは、住民意識の高揚や連帯感の強化、交流の促進などによる地域コミュニティの形成効果、また青少年の健全な育成などの人材育成効果があるという[御園・木田 2007:64]。ここで言及されているスポーツの社会的効果は、第1項で説明した「エンパワーメント」と「コミュニティ・ビルディング」に相当し、地域活性化施策では、特に地域コミュニティの形成効果が重視されていると考えられる。この、「地域コミュニティの形成効果」という点に関連して、近年提唱されているソーシャル・キャピタル論について紹介したい。

ソーシャル・キャピタルとは近年注目を集めている概念で、アメリカの政治学者のロバート・パットナムを中心に議論されている。これまでのキャピタル、すなわち資本は有形に限られていたが、ここでは関係性という無形材を取り扱ったことが先駆的である。ソーシャル・キャピタルは「信頼」「規範」「ネットワーク」の3要素で構成され、人と人との絆を重視する概念である。パットナムはボウリングを例に取り上げ、アメリカにおける地域崩壊とソーシャル・キャピタルの必要性を説いた[横山 2011:328-330]。横山によると、ソーシャル・キャピタルは「橋渡し型」と「結束型」に分けられる。橋渡し型ソーシャル・キャピタルとは地域や属性を超えて様々な人との関係をつなぐことで、そこには「情は人のためならず」という故事のように「いつかは自分も誰かの世話になるかもしれないことを前提に人に良いことをする」といった規範が存在する。結束型ソーシャル・キャピタルは、同質性の高い人々による内部関係での結束や信頼、協力を促進する働きを強めるもので、「自分に何かをしてくれた特定の人にお返しをする」といったような特定の互酬性の規範が存在する。結束型ソーシャル・キャピタルが強力になりすぎると、地域コミュニティの対立など同じソーシャル・キャピタルに所属しないものを排除してしまうような負の側面も指摘されている。しかしこの2種類のソーシャル・キャピタルは相反するものではなく、集団はこの2つの側面を持ち合わせており状況によってどちらが強調されるかが変わるといわれている[横山 2011:330-331]。

日本におけるスポーツとソーシャル・キャピタルの関係についての研究は、散見はされるが未だ体系化はされていない。しかし、スポーツを通して感動し、共感するといったような「人と人をつなぐ」というスポーツの機能は支持されており、スポーツがソーシャル・キャピタルを醸成し崩壊するコミュニティを本来の姿に戻す力があるということが期待される。横山はパットナムの文章を用いて「仲間とのボウリングは、社会的背景や政治的信条、あるいは職業の違いを超えてコミュニケーションやネットワークを成立させ、親密的公共圏を形成する」[横山 2011:334]と示し、チームスポーツが橋渡し型ソーシャル・キャピタルの形成に有効であるとしている。一方でスポーツの形成したソーシャル・キャピタルが持つ過剰な結束力による消極的な側面も指摘している。例えばスポーツの仲間同士で交わされる「同じ釜の飯を喰う」という表現は親密な関係であることを象徴はしているが、その反面で同じ釜の飯を食っていない人を排除する傾向を示している [横山 2011:337]。

以上のようにスポーツは包摂と排除の両面性を有していることから、その活用に注意が必要であるものの、地域活性化のための施策やソーシャル・キャピタル論が明示するように、人々の交流を促して結束を強め、コミュニティを形成する社会的効果を持っていることは間違いないようである。家庭婦人スポーツにおいても、参与者である主婦たちはスポーツを通して家庭の状況や職業の違いなどの差異を超えた親密的公共圏やコミュニティを形成しているものと換言できる。さらに、家庭婦人スポーツ内のコミュニティではスポーツをしている場面でのチームの他のメンバーとの会話や、スポーツをしていない場面での食事など、多様な交流が行われているものと推察される。このようなコミュニティ内の交流では、おそらく主婦ならではの悩み相談や情報交換が行われ、それらは参与している主婦たちにとってプラスとマイナスの両面的な作用を及ぼしている可能性が高く、スポーツを通して形成された家庭婦人スポーツのコミュニティにおける交流が、主婦たちに何らかの影響を与えていると仮定される。

本稿第4章では、スポーツで形成された主婦のコミュニティの中で、どのような交流が行われているのか、またそれによってどのような影響が及んでいるのかについて、インタビュー調査の結果をソーシャル・キャピタル論によって分析する。

3. スポーツ経験の教育的価値と社会的価値

本章第1項で、「人々はスポーツを通して経験を共有し、友情を築く」と述べたが、スポーツを「スポーツの経験」として捉え、その「教育的価値」と「社会的価値」について検討した研究がある。高橋徹は、その論文の中で、インターネットや携帯電話、テレビなどと接触している時間が長いために、擬似的あるいは間接的な経験が多くなり、自然を直接的に経験する機会が不足している説明している。また、日本社会における「経験の貧困化」は子どものみならず大人にも影響を及ぼす問題であるとして、その対応策として「スポーツの経験」の価値やスポーツの存在意義について述べている。

スポーツをスポーツの経験として捉える考え方の背景には、J.デューイの教育思想を中心としたアメリカのプラグマティズム思想がある。プラグマティズム思想においては、「活動を通して経験し、その経験によって学ぶ」というように「経験としての身体活動」という概念が登場し、スポーツが「スポーツの経験」として捉えられるようになった。J.デューイの提唱した経験概念は「相互作用の原理」、「連続性の原理」、「一つの経験」という3つの概念に分類される。

高橋徹はJ.デューイの経験概念を用いて、スポーツの経験における経験概念を、野球の例を用いて説明している。野球では、人間（主観的条件）の存在と同時に、場所や道具、ルールといった環境（客観的条件）の存在が不可欠であり、その両方が存在することで野球は成り立つ（相互作用の原理）。しかし、同じ空間で複数の人間が野球を経験したとしても、それぞれの人間の経験内容は全く異なる。従って、スポーツ経験とは、「運動者自身が環境との相互作用の中から獲得する個別的かつ多様な意味のこと」[高橋 2011:95]であると言える。さらに、このようなスポーツの経験は、日々の生活において、他の経験と混同され、忘れ去られてしまうが、時折連続した様々な経験の中から1つの統一体として取り出すことが可能なものも存在する。高橋徹は、こうした経験が蓄積され、それに対する反省や成功体験が後の経験へ活かされるものを「一つの経験」と表現している。スポーツでは、運動者が自らの能動的な活動を通して環境の非日常性（危険性や困難性）と対峙しそれを克服しようとするため、日常的な他の経験と比べて「一つの経験」になりやすいと言えよう。

スポーツ経験の教育的価値は、その経験の連続性にある。経験の連続性とは、現在の経験が過去の経験から何かを受け取っているのと同時に、将来の経験に影響を与え

る、経験同士が相互に作用する現象そのものである。これについて高橋徹は以下のよう
に説明している。

例えば、運動者が「一つの経験」として獲得した「ホームランを打った経験」や
「エラーを犯した経験」から、運動者はホームランの打ち方を学び、正確なグラブ
さばきを学ぶことで、正しいバッティングフォームを習得し、正しいグラブさばき
を習得することになるのである。(中略)これはすなわち、スポーツの経験が一つの
知識として蓄積され、後の課題解決に生かされるという意味において、スポーツの
経験が他の知識と同様に人間の学習過程や成長過程とも関係していることを示し
ている[高橋 2011:96]。

このように、高橋徹はスポーツ経験の教育的価値を、スポーツにおける新たな経験
の獲得とその後の課題解決という成長のプロセスであると説明している。

またスポーツでは多くの場合、他者との協同活動を行っている。団体競技など、競
技自体を他者との協同で行うものはもちろん、個人競技であっても他者と一緒に練習
し、競い合う相手選手がいるということは協同活動に含まれる。こうしたスポーツに
おける協同活動を通して、運動者は他者と一緒にスポーツ経験を作り、共有する。ス
ポーツにおける他者との協同活動で運動者は全ての活動を他者で行う場合と、責任を
分担する場合があるものの、責任を分担する場合でも各々が全体の一部分に寄与して
いることになる。これについて高橋徹は、「野球では運動者個人個人が異なるポジショ
ンでそれぞれの役割を果たす一方で、責任を分担することによって野球というスポー
ツ全体に寄与している」[高橋 2011:99]と説明している。つまり、運動者それぞれの行
動が合わさることでスポーツが成り立っており、運動者は他者との協同活動を通して
経験を共有する。そして、スポーツの協同経験を通じて様々な問題に対して他者と取
り組む方法を身につける成長のプロセスこそが、スポーツ経験の社会的価値となる。
このようなスポーツ経験の価値が、社会課題への対応策、そしてスポーツの存在意義
として主張されている[高橋 2011:92-99]。

このようなスポーツ経験の教育的価値あるいは社会的価値は、家庭婦人スポーツの
場面でも見られる。教育的価値、と言うと現役の就学生や児童を想像し、すでに教育
現場から離れた主婦は関係がないように思われがちであるが、スポーツ活動における

経験と失敗、それによる新たな経験の獲得という成長のプロセスは、主婦にとって新鮮で心地よい、或いは刺激的な学びとなっているのではなかろうか。また、自分自身がスポーツ活動を通して成長のプロセスを経験することによって、現役児童を子を持つ親として対等に接したり、困難にぶつかった子どもに適切な助言をしたりと、子育てにも良い影響があると予想される。スポーツ経験の社会的価値について、最も重要な点はそれぞれが責任を分担して他者と経験を共有するという点である。このような「それぞれの行動が合わさってスポーツが成り立つ」という視点は、スポーツの持つ独自性であると考えられ、家庭婦人スポーツの参与者である主婦にとって、チームへの帰属意識や「自分がチームに貢献している」という充実感につながっているものと推察される。

4. 先行研究のまとめおよび他の主婦コミュニティとの比較

以上の先行研究を踏まえ、本稿ではスポーツによるエンパワーメントやスポーツ経験における成長プロセスといった、個人に対するスポーツの効果を「スポーツの教育的効果」と定める。また、ソシアリゼーションやコミュニティ・ビルディング、ソーシャル・キャピタルの形成、スポーツ経験における協同経験の価値といった、スポーツにおける人間の関わりに対するスポーツの効果を「スポーツの社会的効果」と定める。そして第4章では実際にママさんバレーボールの参与者を対象に行なったインタビュー調査の結果を分析し、これらの教育的効果、社会的効果がどのように作用しているかについて考察していく。

また、以上に述べたスポーツの持つ効果の視点で、華道や書道、料理教室などの文化活動の習い事、あるいは子どもの幼稚園・保育園・学校などにおけるPTA活動などの他の主婦によるコミュニティの性質を考察すると、華道や書道、料理教室などの習い事は、失敗やそこから得られる新たな学び、という自己成長をもたらす点ではスポーツと共通しているものの、それらの活動が参与者それぞれの行動・責任のもと形成されるとは言い難い。つまり、それらの活動は、参与者に対して自己の成長プロセスという価値を与えることはできるが、他者との協同経験の獲得については、スポーツコミュニティと比べると限定的だと考えられる。

子どもの幼稚園・保育園・学校などにおけるPTA活動について参与者である保護者は、他の保護者とPTAバザーなどの企画に取り組む場合、その活動を通して個人の成

長経験と他者との協同経験の両方を獲得する可能性がある。従って、PTA 活動とママさんバレーボールの差異についてはインタビュー調査結果の分析を通して検討する必要がある。

第4章 ママさんバレーボール参与者への調査

1. 調査方法

(1) 調査協力チームおよび調査対象者の概要

筆者は2018年の11月、12月にかけて、現在ママさんバレーボールチームで活動しているメンバーの方にインタビュー調査を行った。インタビューの協力チームは、茨城県つくば市と埼玉県さいたま市を拠点に活動を行っている2チームで、対象者は合計19人（つくば市9人、さいたま市10人）であった。

茨城県つくば市のチームは、筑波大学女子バレーボール部が指導しているチームで筑波大学体育系の中西康己准教授にご紹介いただいた。チームの人数は約10名で週2回、水曜日と土曜日の19時30分から22時に練習を行っている。埼玉県さいたま市のチームは、チームの人数は約20名で週1回、毎週木曜日の9時から13時に練習を行っている。

表2は、インタビュー調査を行った2つのチームを、練習時間やチームの規模などの観点から示したものである。なお、個人情報保護のため、チーム名は実際のチーム名の頭文字を取って表記する。チームの所属人数はおおよその数字で表記しているが、練習日によって都合が合わず練習に来られないメンバーがいることや、メンバーの家族や別のチームのメンバーが参加することもあるため、練習日によって参加する人数は異なる。

表 2：インタビュー調査協力チームの概要

名前	活動場所	練習時間	チームの所属人数	備考
T	茨城県つくば市 同市にある小学校の体育館で活動	毎週水曜日および土曜日 19:30~22:00	約10人	筑波大学女子バレーボール部の部員が2名、コーチとして参加。 メンバーの知り合いの男性が練習に参加することもある。 調査は2018年12月5日、7日に実施。
P	埼玉県さいたま市 同市にある市営の体育館で活動	毎週木曜日 9:00~13:00	約20人	練習場所は日によって異なり、さいたま市内（主に浦和・大宮近辺）の体育館を借りている。

				調査は 2018 年 11 月 29 日、12 月 13 日に実施。
--	--	--	--	------------------------------------

(取得データを下に筆者作成)

表 3 は、子どもの有無と年齢、就業の有無などの観点から示した、インタビュー対象者 19 名の一覧である。なお、個人情報保護のためインタビュー対象者の名前は、チーム名の頭文字と 1 から 10 の番号で表すこととする。子どもの有無について、子どもなしの場合は「なし」、子どもありの場合は「あり」と表記し、子どもの年齢（対象者が子どもの学年で回答している場合は、学年から推測される年齢）を併記する。就業の有無について、就業なしの場合は「なし」、就業ありの場合は「あり」と表記し、その中でもパート勤務の場合は「パート（頻度がわかる場合は頻度を併記）」、フルタイム勤務の場合は「フルタイム」と併記する。いずれの場合においても、データがない場合（筆者が質問をしていない場合）は「不明」と表記する。

表 3：インタビュー対象者一覧

名前	子どもの有無	就業の有無	名前	子どもの有無	就業の有無
T1	なし	なし	P1	あり 30 過ぎ。	なし
T2	あり 15 歳、21 歳	不明	P2	あり 12 歳、17 歳	あり パート(週 3)
T3	あり 25 歳、26 歳	あり フルタイム	P3	あり 12 歳、15 歳	あり パート(不明)
T4	あり 12 歳、15 歳	あり パート(週 3)	P4	あり 4 歳、6 歳	なし
T5	あり 9 歳、11 歳、13 歳	あり フルタイム	P5	あり 13 歳、15 歳	あり パート(不明)
T6	あり 15 歳	あり フルタイム	P6	あり 6 歳、10 歳	なし
T7	あり 20 歳、24 歳	あり パート	P7	あり 12 歳、18 歳	なし
T8	あり 14 歳	あり フルタイム	P8	あり 中学生と高校生	あり パート(不明)
T9	なし	あり フルタイム	P9	あり 14 歳、16 歳	あり パート(不明)
			P10	あり 7 歳、12 歳	あり パート(週 3~4)

(取得データを下に筆者作成)

(2) 調査方法と研究課題

本インタビュー調査は、半構造化インタビューを用いて行った。半構造化インタビューは、大まかな質問の内容を予め決めておくが、回答者の回答に応じて質問の内容を変更すること、あるいは深く掘り下げて話を聞くことができるなど、新たに生じた疑問について臨機応変に対応できることが特徴である[寺島 2011:414]。

調査に先立ち、筆者は以下に示す独自の研究課題を設定した。

- ①ママさんバレーボールに参加することで、育児や家事などの課題が改善するのか？
- ②ママさんバレーボールに参加することで、主婦の自由な時間に対する家族の理解が深まるのか？
- ③スポーツを通じて形成される主婦のコミュニティは、他のコミュニティと異なる性質を持つのか？

まず、研究課題①については、ママさんバレーボールに参加することで自分と同じ「主婦」という立場の他者と交流し、そこでの会話や情報交換を通して自分が抱えていた育児や家事などの主婦特有の課題が解決されるのかを問う。序論でも述べたように、今までは親子3代の家庭が多く、主婦の先輩である母あるいは義母から育児や家事のサポートを受けることが可能であったが、核家族化が進む現在では、こうしたサポートを受けることが困難である。ママさんバレーボールに参加することで、そのコミュニティ内で同じ立場の他の参加者と交流することがサポートとなり得るならば、ママさんバレーボールが主婦にとって有益であると言うことができよう。なお、育児や家事のサポートは他の参加者からのものに限定されているわけではない。主婦がママさんバレーボールに参加するためには、夫をはじめとする家族が以前に比べて育児や家事を手伝うなどの家族のサポートが必要となり、家族によるママさんバレーボールの理解が不可欠となる。この点が、以下で説明する研究課題の②に関連する。

研究課題②では、主婦の自由な時間に対する家族の理解について探る。この問いは、インタビューの事前調査時に現場を訪れた際に得られた情報に基づいて設定した。ママさんバレーボールの参加者等は家族の理解を得て獲得した自由な時間に主婦業から離れてバレーボールや他の参加者との会話を楽しんでいると感じた。ここで示す「自由時間」とは、妻であり母親である主婦が個人に戻る時間のことを指す。上野が提唱した「女縁」理論のように、そこにおいて夫や子どもの話をしない時間と言うことではない。むしろ主婦であることを否定せず、なおかつ自分の時間が持てているという

文脈である。ママさんバレーボールという主婦の自由時間に参加することで、育児や家事の課題が解決・悪化するかを問い、それによって主婦の自由時間に対する家族の理解が変化するかを検討する。

研究課題③は、第3章で整理したスポーツの教育的効果・社会的効果を軸に、スポーツを通じた主婦コミュニティが他のコミュニティとの違うのかをと問う。第3章の説明で述べたように、スポーツには教育的効果および社会的効果があると考えられている。人々はスポーツによって競い合うだけでなく、共に興味関心や楽しさ、経験を共有し、友情を築きコミュニティを形成するとされており、このコミュニティへの参加者の帰属意識はスポーツによって高められる。本稿では、このようなスポーツの教育的効果・社会的効果が研究課題①と②にも影響を与えているのについても検討したい。

以上の3つの研究課題を踏まえ、スポーツの枠組みでの女縁、即ちママさんバレーボールが主婦にとってどのようなコミュニティになっているのかということについて考えたい。

2. 調査結果の分析方法

本節では、インタビュー調査によって得られた語りを主題分析によってカテゴリーに分けて提示し、その特徴を明示する。主題分析とは、インタビュー調査のような質的調査のデータから、主題を見つける分類方法である。まず、インタビューから得られた対象者の発言内容について発言の要旨によって短い言葉でラベルを付与し、内容が関連していると思われるラベルごとに1つにまとめて共起図に起こした。それぞれのラベルのまとまりに共通している言葉を抽出した。その結果、(1)スポーツとしてのママさんバレーボールの特性、(2)生活の中のママさんバレーボール、(3)コミュニティとしてのママさんバレーボール、(4)家族とママさんバレーボールの関わり、(5)ママさんバレーボール以外のコミュニティ、の5つのカテゴリーに分類された。

以下、カテゴリーごとにインタビュー対象者の発言内容を示し、考察を加える。なお、カッコ内は筆者による補足である。

3. ママさんバレーボールの競技特性

インタビューでは、バレーボールの楽しさや、9 人制バレーボールの面白さについての発言がいくつか聞かれた。本節では、それらの内容に関するインタビュー中の語りを引用し、スポーツとしてのママさんバレーボールの特性を分析する。

T2 は、バレーボールの楽しさについて以下のように述べている。

筆者「今までバレーを続けている理由とかって何がありますか。」

T2 「楽しいから。」

筆者「それが一番ですよ。」

T2 「うん。ちっちゃいときやってなかったんで、おばさんになってもできなかったことが少しずつできるようになるとやっぱり嬉しいかなあ。うん、ママさんからだったから。」

筆者「なるほど。その、スポーツでできなかったことができるようになるのが楽しくて、続けていらっしゃるということですね。」

T2 「そうですね。うん、バレー楽しいかな。バレー自体が楽しい。」

この語りからは、T2 が大人になってから始めたバレーボールで、「できなかったことができるようになる」という点に魅力を感じていることが読み取れる。これは第 3 章 3 節で説明したスポーツ経験の教育的価値に相当する。バレーボールでの経験と失敗、またそれにより新たな経験を獲得するという成長のプロセスを、大人になって結婚し、子どもを産んでからも経験できていることに、バレーボールの楽しさを感じているのである。T2 の他にも複数のインタビュー対象者が、このような「できなかったことができるようになる」ということをバレーボールの楽しさ、あるいはバレーボールを続けている理由に挙げており、「拾えなかったボールが拾えるようになるのが楽しい」「勝てなかったチームに勝てるようになるのが嬉しい」といった語りが散見される。

筆者「ママさんバレーをされていて何か良かったことというのはありますか。」

T2 「何かあるかなあ。でも、基本、運動が好きで、子どもが生まれてできなくなっちゃったりして。(以前やっていた) 個人の競技が。できなくてってい

うところがあって。バレーに差し替わったところがあるので、スポーツ自体好きで、仲間がいるからやっぱり続けられるかな。チームプレーが楽しい。」

筆者「なんでチームプレーが楽しいと思われませんか。」

T2 「一人だったら諦めちゃうところがやっぱり仲間が誰かいれば頑張れる。今、実はボウリングもやっているんですけど、それは個なので。やっぱりそれは精神とか、自分だけ。それとは別にママさんは、やっぱり自分がミスしてもカバーしてもらったり（チームメイトがミスをしたときに）声かけたり、そういうのを得られるかなあ。」

T2 は、ママさんバレーボールの「チームプレー」という特徴にも楽しさを感じていることがわかる。T2 は元々ウィンドサーフィンやボウリングといった個人プレーの競技も行っており、そのことも T2 が個人ではなくチームでプレーすることを意識する要因になっている可能性がある。また「自分がミスをしてでもカバーしてもらう」「他の人がミスをしたら自分がカバーする」といったような助け合いの意識と、バレーボールは個人のプレーだけで成り立つのではなくそれぞれの動きが合わさって成り立っているという意識が発言内容に表れている。この特徴は第3章第3節で述べた「スポーツ経験の社会的価値」と重なる部分が大きい。他の対象者の語りの中にも「チームプレーが楽しい」という発言は非常に多く見られたため、スポーツとしてのママさんバレーボールの大きな特徴の1つであると言える。

さらに、チームプレーに関連して P2 は以下のように語っている。

筆者「バレーの何が楽しいですか。」

P2 「なんだろう。こう、みんなで1個のボールをつないでっていうのが楽しいかなあ。」

筆者「確かに、結構それがなんか特殊なところですよ、バレーボールの。」

P2 「そうそう、落としちゃいけないっていうのが。」

筆者「そういう、競技の面っていうのは、メンバーの気持ちの面にも結構影響与えているんでしょうか。」

P2 「そうかもね、うん。」

筆者「ママさんバレーをしていた良かったなっと思うことは何かありますか？」

P2 「良かったなっと思うこと...なんだろう。ストレス発散かな。なんかやっぱり自分の時間が持てて、なんかボールだけに集中できる。なんかそういうのがあんまりないので良いかなっと思います。」

ここでは、P2 がバレーボールの「ボールを落とさずにつなぐ」というルールに対してバレーボールの楽しさを見出していることがわかる。攻めるときも守るときも、ボールを地面に落とさないように協力し合いながらつないでいくというのは、確かにバレーボール独特の性質であると言える。加えて、P2 は日常から離れてボールに集中することが自身のストレスの発散になっていると語っており、ママさんバレーボールの場が非日常的な空間でそれが自分にとって必要なものだと感じていることがわかる。

第2章第2節で、ママさんバレーボールは9人制を採用していると述べたが、インタビューでは9人制バレーボールのルールや9人でプレーすることについての語りもいくつか見られた。以下はT4の9人制バレーボールの特性についての語りである。

筆者「ママさんバレーを続けていらっしゃる理由で、やっぱり『バレーボールが楽しい』っていう風におっしゃっていただいたんですけど、バレーのどういうところが楽しいなっと思われますか。」

T4 「元々テレビで見るとも好きで、個人プレーよりチームプレーで、一人がうまくてもダメだし、声出してみんなでつないでいくスポーツなので。6人制しか今まで見てなかったんですけど、やっぱりママさんで9人制を始めて。ネットプレーっていうんですけど、ネット使って4回触れるとかそういう変わったルールを初めて知って、9人制なりのやり方みたいなのもすごい教わって。難しいけど、私セッターなので見せ所みたいな感じで。ネットプレーをするとそこで時間を使えて、違うプレーが生まれる。」

筆者「一息、みたいな。」

T4 「そうですね、攻撃を組み立てられるみたいな。6人制は6人制でね、楽しいんですけど。」

筆者「なるほど、別の楽しさが。」

T4 「うん。ブロックでワンタッチ、1本数えられちゃうんであと2本しかできないっていうので2段トスが大事とか。そういう変わったルール、初めて知ったルールの中で、初めてのことがいっぱい頭に入ってきたので楽しいんですね。まだまだ、40、うん歳ですけど、まだまだ自分でも伸びしろを感じてやっぱりやめられずに。」

T4 は、学生のときに部活動などで6人制のバレーボールをプレーしていたわけではないが、テレビを通じて6人制のバレーボールをよく観ていたという。自身がママさんバレーボールを始めると、6人制バレーボールと異なる9人制独特のルールに6人制とは別の楽しさを感じていることがわかる。また、主婦であっても新しいことが頭に入ってきてそれを実際に試してみることが楽しく、T4にとって生活の良い刺激になっていることも読み取れる。9人制バレーボールの特性については、人数が多い分相手のコート内でボールを地面に触れさせる、つまり得点を取ることが難しいという点や、狭いコートの中に9人のプレーヤーがいることでボールを追って鉢合わせになることも多いという点についての語りも聞かれた。このように、対象者たちは9人制バレーボールの特性も強く意識しており、それらの特性がママさんバレーボールに影響を及ぼしていると言える。

また、参加者の母親が現在まで継続してバレーボールをしているという語りも見られた。

P3 「私の母親はまだ（バレーを）やっている。」

筆者「まだやっているんですか。ことぶき（60歳以上という年齢制限が設けられている婦人バレーボールの大会）とかもっと上ですか。」

P3 「70代ばかりのバレーボールがあるのよ。だから生涯スポーツだわね。そしたらそれなりのバレーボールなのね。ジャンプもしないしブロックもしないし。」

筆者「危なくないように。」

P3 「そうそう。だけどボールは落ちないみたいなの。みんなママさんバレーボールやってた人が、70代でもやりたいって言って。」

対話に記されたように、70歳を超えてもバレーボールを楽しむことができるようにルールを工夫したバレーボールも存在する。以上の理由から、P3の発言にもあり、第2章第3節第3項で取り上げた大原の研究でも明示したように、ママさんバレーボールは生涯スポーツと捉えることが可能である。

4. 生活の中のママさんバレーボール

ママさんバレーボールの活動は、バレーボールをしている時間だけでなく参加者の生活に様々な影響を与えている。本節では、ママさんバレーボールが参加者の生活にどのような変化をもたらしているのか、という点について考察する。

ママさんバレーボールによる生活の変化について、最も多かった回答は参加者の交友関係についての語りである。

筆者「ママさんバレーをしていて、何か良かったことはありますか。」

T8 「友達がいることかな。仕事して自営業で、家族としか接していない状況で、家に帰ってもやっぱり家族しかいないし。仕事と関係ない人達とも関わりができる。」

筆者「ママさんバレーを一回引っ越しでやめたのにも関わらず今も続けていらっしやると思うんですけど、どんな理由がありますか。」

P6 「やっぱり体を動かしたいのと、引っ越したらもう、子ども達はね学校とか、旦那も職場でつながりがあるけど、全く孤立でしょう、主婦って。だからこう、引っ越しが落ち着いた頃に『あー暇だな』って思って、友達もいないし体も動かしたいしって思って。」

筆者「ママさんバレーをしていて良かったことは何がありますか。」

P6 「バレー、ストレス発散、と身体を動かせる場所があるっていうのと。こういう同じママさんたちとお話できる、お友達ができたこと。」

T8 と P6 の語りからは、ママさんバレーボールを通して家族や仕事仲間以外の交友関係ができたこと、またそれを彼女たちが自分にとって良いことだと感じていることがわかる。特に P6 は香川県から引っ越してきたばかりで、夫や子どもはそれぞれ会社や学校で交友関係があるのに対し、自身は仕事をしていないために交友関係がなか

ったのがママさんバレーボールを始めたことで解消されたという。そして自分と同じ立場であるママさんと会話すること、またバレーボールで身体を動かすことがストレス発散になっていると話している。ママさんバレーボールではメンバーが他の仲間を連れて練習にくるといったことも多くあり、それによってさらに交友関係が広がるという回答も多くみられた。このようなチーム内の交友関係については次項で詳しく述べる。

ママさんバレーボールによる交友関係は同じチーム内に留まらない。バレーボールを通して他のチームともつながりができるという。

筆者「T3さんは、今までバレーを続けている理由について、外に出て誰かと関わることが楽しいということだったが、それはどうして、何が楽しいんでしょうか。」

T3 「色んな世界が広がるっていうか、知り合いにもなれるし。やっぱり枝分かれしていくじゃないですか。そのチームからさらに後ろの人たち。で、結構バレーの世界って狭くて。意外とここで知り合った人のその先の人が実はこっちで知っていた、とか。そういうのがあって意外とバレーの世界って狭いんだなって思いますけど。まあでもそういう人のつながりが、良いかなって思います。」

筆者「友達が増えて良かったことは何かありますか。」

T3 「今は子どもがもう手が離れちゃったのでなおさらなんですけど、自分の時間がとてもできちゃうので。今まで子どもに向いていたいろんなものが、『じゃあどこに向けたら良いんだろうか』ってときに、自分の時間を使う方法としてバレーがあったっていう。最終的にはね。」

筆者「なんかそういうのって、ありますよね。育児ロスみたいな。」

T3 「そうそう、子離れ。親が子離れをするのってやっぱり（難しい）、子どもはどんどん離れていくけど親はあれなので。そういうときに、『こういうのがあって良かったな』って思います。」

筆者「チーム同士のつながりとかあるんですか。練習試合やったりとか。」

T3 「練習試合はあるし、結構私土浦のチームとか知ってるので。つくばの試合に出るのがメインなので、相手がいつもつくばのチームだと楽しくないので、土浦のチームの方に練習試合に行ったりは、たまにしています。」

筆者「それは T3 さんの知り合いですか。」

T3 「そう知り合い。つながりで。そんな感じです。」

T3 は、バレーボールを通して自分のチームに留まらず別のチームのメンバーとも交友関係ができると話している。大会に参加した際に別のチームと知り合いになることもあり、大会のあとに練習試合を組んだりすることもあるという。他の対象者の語りでは、バレーボールという共通の趣味があるために会話が広がりやすいということがあったり、初対面の相手でも打ち解けやすいというような内容が話された。T3 は、つくば市の隣に位置する土浦市のチームとも交流があり、普段と異なるチームと練習試合をすることもある。このようなママさんバレーボールを通じた別のチームとのつながりはさいたま市で活動しているチーム P にも見られ、インタビュー調査を実施した 2018 年 11 月 29 日、チーム P は浦和駒場体育館で練習試合を行っていた。

ママさんバレーボールによる生活の変化については、以下のような語りも見られた。

筆者「ママさんバレーをしていて、困ったことはありますか。」

T5 「困ったことは、家のことよりママさんバレーがしたくなっちゃうので、なんか疎かになりがちなんですけども、子どもはそっちのほう嬉しいみたいな。」

筆者「それは、ママが出かけていた方が。」

T5 「そうそう、うるさく言われないし。やっぱり親も好きなことしている分、子どもにも優しくなれるんで。」

筆者「やっぱりお家のこととかが疎かになっちゃってバレーばかりになってしまいうことはあるんですね。」

T5 「そうですね。も行くからには、ぼーっとしているよりは早くやらなきゃって思うので、やることはやるんですけども。あんまりデメリットはないかな。」

筆者「ママさんバレーをされていて、する前と今と、何か変わったことはありますか。」

T5 「それは、自分の生活が楽しくなったっていうのと、体調が良くなったっていうのと、あとダラダラしなくなった。なんかもう、スケジュールも密になっちゃうので、早く動かないと家も回らないっていうのもあるんですけど。前向きになったっていうか。」

筆者「さっきおっしゃっていたような、子どもに優しくなれることも含まれますか。」

T5 「そうですね。旦那にも（優しくなれる）。それは間違いなくそうですね。」

T5 はバレーボールが大好きで、家でやるべきことよりもママさんバレーボールがしたくなってしまうことが困ると話す一方で、自分が好きなことをできている分、夫や子どもに対しても優しくなれるという。T5 はフルタイム勤務で働いており、仕事や家事・育児に多くの時間を費やしているが、ママさんバレーボールという自身の趣味があるため、そこでうまくストレスが発散され、そのことが家族への態度にも表れていると考えられる。また、「ママさんバレーボールに行きたい」という気持ちが家事の後押しになっており、家事が早く終わり、さらに趣味のバレーボールにも行くことができるため、気持ちが前向きになったという。このような、「ママさんバレーボールに行きたいから家事を早く終わらせる」という内容は、P4 の次の語りにも表れている。

「まあ何か、これじゃなくても良いと思うんですけど、何か1つこう、これを頑張りたいから他のものが追随していくというか。これをやりたいからじゃあ、ちょっとさっさと洗い物終わらせて行くべ、みたいな感じがあるので。」

これに関連して、T8 はママさんバレーボールによって生活のリズムが変化したことについて、以下のように語っていた。

T8 「(バレーがあるので) 水曜と土曜は必ずお母さんは家にいません、みたいな。お夕飯早いです、みたいな。(練習開始時間が) 7時半なんで。でも主人も農家なので早く寝るので、で息子も塾に行くようになったんで。中学生の

塾って夕方 6、7 時くらいからじゃないですか。そうすると、夕飯の時間も早くなってきたんで、今は良いんですけど。数年前までは水曜と土曜だけは夕飯がやけに早いみたいな。」

筆者「他の日に比べて。」

T8 「何だこの夕飯は、みたいな。簡単じゃない？みたいな。だからその日に限ってすごい力入れたりするんです。早いのを補うためになぜか天ぷら揚げてるとか。こんだけ作ったから私は出かけていいでしょアピールをして出かけていく。大変、大変なのよ。戦争よ。」

筆者「お父さんとですか。」

T8 「一人で戦争、自分と。」

チーム T の練習時間は夜 7 時半から 10 時までであるため、T8 のように夕飯を早めに準備して家を出るメンバーが多い。T8 の家は農家で、夫も早く帰宅するため子どもが家に 1 人になることを危惧することは少ないが、夕飯が早いのを補うためにわざと普段より凝った料理を作るなどして工夫をしているという。チーム P は練習時間が午前中の家族が外出している時間であるため、このような語りはなかった。チームの練習時間によっては家族の生活のリズムに影響を与える可能性もあるということがわかった。

ママさんバレーボールによって、参加者が困るような生活の変化についての語りも見られた。

筆者「ママさんバレーをされていて困ったことはありますか。」

P3 「困ったこと。それはやっぱり怪我かな。去年私も骨折したんですね。やっぱり怪我とか、怪我まで至らない（程度の）、膝が痛くなったりとか。運動して体が丈夫になっていう反面、そういう怪我もあるかな。」

筆者「怪我をするとどうなりますか？なにかに影響が出ますか。」

P3 「やっぱり家事に影響が出るよね。私は特に右手だったから。」

筆者「ママさんバレーをされていて何か良かったことはありますか。」

T8 「良かったこと…。風邪引かない。身体が強くなる。ちょっと風邪引いてもすぐに良くなるし、バレーに行きたいから風邪引いても結構内緒にしておくと、運動しちやえばすぐに良くなる。とにかく体力が、してなかったときと（全然違う）、子どもを産んですごく体力も落ちるし。前は年に必ず一度は 40℃の熱出して寝込んでっていうのが無くなって。」

筆者「そうなんですね。それがやっぱり一番ですか。」

T8 「一番。健康。でも怪我はね、する。」

筆者「そうですね、怪我しますよね、多分。」

T8 「しました。ちょっとだいぶ大きな怪我をして、それがかえって怖いかなっていうのもあるけど。」

筆者「怪我されたときはどうなりますか。」

T8 「生活苦が来ます。自営なんで仕事がまともにできなくなるのと、とにかく家族がすごく迷惑がるから。家族に迷惑をかけるのが一番大きい。」

筆者「じゃあ、自分の身体と相談っていう感じですね。」

T8 「そう、だから今も無理をしないで、楽しめる程度に。」

P3 と T8 は、スポーツをすることで身体が丈夫になったという反面、バレーボールによる怪我が困るというように語っている。バレーボールは、相手チームとネットで隔てられているため相手チームとの接触は少ないが、ママさんバレーボールは 9 人制のバレーボールであるため同じコート内に 9 人ものプレーヤーがいれば、同じチームのプレーヤー同士の接触が起きる可能性は高い。トスをした際の突き指や膝の痛みなどの軽い怪我であればその後の生活への影響は小さくて済むが、ジャンプをしたり腕を大きく動かすことが多いスポーツであるため、生活に影響を及ぼすような大きい怪我もあるという。また、怪我をすると家事に支障が出て家族に迷惑をかけるという点についても、複数の対象者が語っている。ママさんバレーボールに行きたい気持ちが家事や育児を後押ししてくれることもあれば、反対に怪我がそれらを妨げることもあるということがわかる。さらに T9 はママさんバレーボールによる生活への影響について以下のように語っている。

筆者「ママさんバレーをされていて何か困ったことはありますか。」

T9 「今つくば市の（バレーボールの）役員をやっているんですけど。仕事をしているのですがそういう役職にはつきたくなかったんですけど、逆に仕事をしているから PC が使えると思って、あてがわれちゃったっていう。逃げ出せない。」

筆者「それは何の役割をされていらっしゃるんですか。会計とかですか。」

T9 「今は、つくば市で行う大会の役員なので書類作りとか、実際の大会の会場のアレンジとかそういうのですね。運営の方ですね。」

筆者「結構大変そう。」

T9 「うん、面倒くさいんですよ。」

筆者「何かママさんバレーに参加する上で妨げになるものとかありますか。」

T9 「仕事ですかね。」

筆者「一番はやっぱ仕事ですか。仕事とかぶったりしますか。」

T9 「そうですね。出張と被ったりとか、あとはあんまり練習に来られなかったりとか。」

T9 はフルタイム勤務で働いているため、仕事がママさんバレーボールの練習や大会と重なってしまうことがママさんバレーボールの活動からの阻害要因となることがあるという。さらに、仕事をしているためにパソコンを使った事務作業が得意だと認識され、本当はやりたくないと思っている仕事をさせられていることをマイナスに感じている。しかし T9 は役員の仕事をやめたいとは思ってはいるが、ママさんバレーボール自体をやめたいと思っているわけではない。むしろ好きなので続けたいと思っている。つまり、役員の仕事によって自身の生活に多少の支障は出るけれども、ママさんバレーボールに参加する意欲にはさほど影響を与えていないと言える。

5. コミュニティとしてのママさんバレーボール

本節では、それぞれのママさんバレーボールチームの中で、どのような活動が行われ、それらが参与者にどのような影響を与えているかということについて、インタビュー中の語りを引用して分析する。

まず、それぞれのチームがどのような人々が集まり成り立っているのかということについて述べておく。チーム T は以下のとおりである。

筆者「このチームって近くに住んでいる方が集まってると聞いてんですけど…。」

T6 「そうですね。」

筆者「それはやっぱりこう、子どもの学校の親同士っていうよりかは、お知り合いのお知り合いっていう感じで集まっているんですか。」

T6 「そうじゃなくて、もともとこの T っていうチームがあって、竹園だから多分竹園地域の人？ 吾妻とか手代木とか桜南⁽¹⁰⁾とかあるから。でもだからってその地域の人だけってわけじゃないと思う。地域で区分しちゃうと私は竹園じゃなく、住んでいる地域では違う地域になっちゃうので。なんか土浦なんかは、地域でしかチーム入っちゃだめみたいなのもあるので。」

チーム T は、元々つくば市竹園地区の人々が集まってできたが、現在では地区はほとんど関係なく、メンバーがそれぞれ知人を誘い合って成り立っている。T6 は竹園地区に住んでいるわけではないが、T6 の知人がチーム T に所属しており、その知人の誘いでチームに入ったという。チーム P の成り立ちは以下のとおりである。

P8 「ここのチームは、最初は先輩たちが作ったチームなんですけど解散してしまったので、そのあとに P9 さんと立ち上げたっていうか引き続いだ。だから最初は人数もすごい少なくて、5 人くらいしかいなかった。」

筆者「なるほど、そうだったんですね。それからここまで大きくなったのすごい。」

P8 「ああ、ママ友（のつながり）。友達の友達。幼稚園の友達、とか。」

筆者「チームの人ってどうやって集まっているんですか。」

P9 「いろいろ。一応友達の友達とか、幼稚園、まあ幼稚園のママ友だったりとか紹介とか。あとね、ジモティー⁽¹¹⁾で募集もかけてるし。」

筆者「ジモティーですね。」

P9 「そうそう。あとは体育館に張り紙もした。」

筆者「それはここの体育館（浦和西体育館）とか、浦和駒場とか。」

P9 「そうそうそう。貼ったりしたところもあるし、あとはソフトバレーをやっている人がいるからそこから（人を）引き抜いてきてもらったり。」

筆者「じゃあ別に同じ、こう必ずしも同じ学校の人が集まってるっていう感じではなくて、結構バラバラで。」

P9 「むしろバラバラです。」

チーム P は、結成当時は同じ幼稚園の主婦同士でメンバーを構成していたが、一度解散している。その後 P8 と P9 がチームを引き継いで新しいメンバーが次々と増えていったという。メンバーの集め方としては、子どもの幼稚園や学校で出会った友人を誘ったり、「ジモティー」というインターネットの掲示板や活動場所である体育館の掲示を利用して、メンバーを募集しているという情報を拡散するという方法を取っている。

ママさんバレーボールによる生活の変化に交友関係の広がりがあると述べたが、チームの構成メンバーが様々な場所から集まっているからこそ、同じチーム内でもそれまで関わったことがない人と関わりを持つことができると考えられる。

では、たくさんチームがある中で参加者たちはどのようにチームを探したのか、あるいはどのような基準でそれぞれのチームを選んだのか、ということについて見てきたい。

T5 と P6 は、チーム T を選んだ理由を以下のように語っている。

筆者「T5 さんが、このチームに入られたのはどうしてですか。」

T5 「近いから。」

筆者「この小学校が近いから。」

T5 「はい。」

筆者「探すときはどうやって探したんですか。」

T5 「本当家がすぐそこなんで、見えるんで。子どもが小さいので、始めたときはもっと小さかったんで、もう近くないと帰れないので。留守番とかもしたりするので。」

P6 「私は、バレーをやれる環境をジモティーで探してここにたどり着きました。」

筆者「他のチームも見に行かれたりとかしたんですか。」

P6 「しました。あと1個くらい、地元の小学校の（チーム）。PTA バレーなんだけど、夜の練習なのね。まだ幼稚園児もいるし、夜はちょっと。」

筆者「難しいですね。」

P6 「やっぱり午前中ガッツリの方が。」

T5 は子どもが小さいときにママさんバレーボールを始めた。T5 はフルタイム勤務で働いており、またつくば市のチームは練習時間が夜のチームが多いため、ママさんバレーボールに出かける時間が夜になってしまうのは避けられなかったが、練習が終わった後なるべく早く家に帰ることができるよう、家からの距離を重視してチームを選んだという。

P6 は、まだ幼稚園に通っている子どもを抱えている。さいたま市ではチーム P のように昼間に活動しているチームもあれば、小学校の体育館などを借りて夜に活動しているチームもある。P6 は一度家から近い小学校で活動しているチームの練習に参加しているが、若い子どもがいることから夜の練習に参加することは困難であると判断し、夫や子どもが出かけている昼間に練習ができるチーム P を選んでいる。このように、ママさんバレーボールの参加者はそれぞれの状況に合わせて所属するチームを選んでいることがわかる。また、参加者によっては2つ以上のチームを掛け持ちしている者もいる。

筆者「チーム同士で交流とかあるんですか。」

P8 「チーム同士、やっぱりありますね。ここに来てる人（の中）でも、私がもう1個入ってる方のチームから来てる子もいる。同じようにこっちから連れて行ったりもして。練習量がどうしても足りなくなっちゃったり、今週休んじゃったら来週まで練習はないから、その間にちょっと練習するのに。曜日変えてとか。夜もやってるところもあるから。夜行けるときに行くっていうので体力を落とさない。ボールってやっぱり触らないと鈍るから、継続的にやるっていう。」

筆者「なるほど、じゃあ自分で調節できるようっていうことですね。」

P8 「そうそうそう。逆にここはがつつきくるけど、私は。だけど他のところは休んだりとかもあるし、そっちの方が本当に子どもの方を優先したりとか。」

P8 は、自身の練習量を調節するためにチーム P 以外のチームを掛け持ちしており、状況に合わせて参加している。掛け持ちしているチームのメンバーをチーム P の練習に連れてくることもあるといい、大会や練習試合を通したチーム同士の交流以外にも、このような掛け持ちをしているチームのメンバー同士の交流も起きていることがわかる。

また、チーム P の雰囲気については P5 が以下のように語っている。

筆者「今も（バレーを）続けていらっしゃる理由は何がありますか。」

P5 「今はやっぱり、みんな子どもがいてみんな近い歳の子がいて、で結構話も共通の話題があるし。あとはやっぱりずっとやっていると、あんまりギスギスしていないというか。仲良し。で、先輩たちも熱心に教えてくれて、結構なんか気分転換というか。」

筆者「チームの雰囲気は結構良いんですかね。」

P5 「そうですね、良いと思います。みんな結構世代も近いので。で、先輩たちもすごい楽しい先輩たちなんで、厳しいけど結構楽しくって。」

チーム P には、子どもがいない若い主婦や子どもがすでに結婚するなどして同居していないメンバーもあり年齢層が広いが、それぞれの世代がある程度の人数所属している。子どもがいるメンバーが多いため共有の話題が多く、チーム内の交流が盛んで雰囲気が良いという。また、チーム P では公式の試合からは引退した先輩のメンバーが何人かおり、先輩メンバーがコーチとしてバレーボールの技術を指導している。先輩メンバーから指導が入ると、練習の雰囲気は一気に締まるが普段は年齢関係なく和気あいあいとしていて、非常にメリハリがついていると感じた。このような雰囲気はチーム T も同様である。チーム T では筑波大学女子バレーボール部の部員が有償のコーチとして練習に参加している。コーチからの指導が入ると、相手が大学生であつても「指導してもらっている」という意識からか「はい！」という返事が聞こえる。ど

ちらのチームも、まるで中学校・高等学校の部活動のように、練習している時間とそれ以外の時間の切り替えがなされていた。

さらに、チーム T ではメンバーの役割分担が明確に決まっている。

筆者「チームの中で役割分担とかありますか。キャプテン以外で。」

T2 「例えば、何とかカップとかの役員とか。」

筆者「あと、場所取りとか。」

T2 「ここは多分鍵当番を月ごとに変えたり、あと会計とキャプテンは毎年いて。

鍵当番は持ち回り。あとコーチの送迎も持ち回りというか割り振りしてやっています。」

筆者「コーチも送迎しているんですね。」

T2 「そうそう。『誰行けますか。』って。大体キャプテンと会計の人が音頭を取って、『今日行きまーす』とか言って、LINE でみんな。」

筆者「そうなんですね、チームの LINE で。」

T2 「そう、チームの LINE で。コーチも入ってるので。」

T7 「つくば（のチーム）って結構キャプテン変わるんです。他のところは普通は、キャプテンって言ったらずっとキャプテンなんだけど。うちは、一年ごとに変えてます。」

筆者「そうなんですね。そのキャプテンって誰が決めるんですか。」

T7 「キャプテンは前キャプテンの推薦っていう感じ。」

T2 と T7 が話しているように、チーム T ではキャプテンの他に会計係と、使用している体育館の鍵当番という役割分担がある。キャプテンと会計係は一年ごと、鍵当番は月ごとの持ち回りである。そのほかにコーチを練習場所まで送迎する役割も、分担して行っている。T7 は現在チーム T のキャプテンを務めており、練習開始前後のミーティングや練習を仕切るなど、チームの指揮を執る役割である。また試合の際のメンバーを決めるといった、監督のような役割も持っている。

以上のようにママさんバレーボールのチームはメンバーを集め、役割分担をして成り立っている。ここからは、チーム内のメンバー同士の交友関係について分析していく。チーム内のメンバーとの交友関係については、以下のように語られている。

筆者「(チームの人と) バレー以外の場所でも会ったりとかするんですか。」

P9 「うん、なんか普通に幼稚園の友達、ママ友とかもいるし、まあそうじゃない人もいる。大体住んでるところが近いから。だからなんか飲み会とかそれ以外のイベントもよくやるし。」

筆者「それはチームでのイベントですか。」

P9 「そうそう、今度のクリスマス会もそうだし、ランチ会とか、あと飲み会。忘年会とか新年会もやります。」

筆者「バレーの人との付き合いはどうですか。ここ以外で会ったりされますか。」

T2 「ここ以外で。仲良いと思う。」

筆者「一緒にお出かけされたりとか。」

T2 「あるある。それこそ筑波大の試合観に行ったりとか。そういうのは誰と行っても大丈夫だし。」

P9 と T2 の語りからは、どちらのチームでもママさんバレーボールの場所だけではないそれ以外の日常でも一緒に外出をしたり、チームでの食事会やクリスマス会のような季節のイベントも開催するなどの交流があることがわかる。また、T2 が話しているように、チーム T のメンバーは普段コーチとして接している筑波大学女子バレーボール部の試合を観戦に行くこともあるという。さらに、T7 はママさんバレーボール以外にホットヨガのスタジオに通っているが、バレーボールのチームでその話をしたところ別のメンバーも同じスタジオに通うようになったという。このように、ママさんバレーボールの参与者たちは、同じチームのメンバーとバレーボールの活動の場に留まらず、他の日常でも同じ時間を共有していることがわかる。

さらに、T3 はママさんバレーボールのメンバーとの付き合いと子どもの学校の母親同士の付き合いの違いについて、以下のように話している。

T3 「やっぱり子ども関連の環境だけだったのが、ちょっとうちがって、友達が増えたっていうのはありますね。」

筆者「お子さんだけのつながりだとあれですか、学校の役員とか PTA とか。」

T3 「そうそうそう。」

筆者「でもそういうのって、卒業するとなくなっちゃうって言いますよね。」

T3 「そうですね。あとはやっぱり子ども通しての付き合いなんでどうしても、子どもが間に入るとなかなか難しいんですけど。まあね。色んな方がいるので。子ども同士が喧嘩しちゃうとどうしても親同士もぎくしゃくしちゃうたりするので。」

筆者「そういうのはバレーはないですか。」

T3 「そうですね、自分が所属していたところでは、今（のチーム）も全然子どもとか関係ないので。」

T3 の語りによると、子どもの学校の役員や PTA 活動での付き合いは子どもを通した関係であるため、間にいる子ども同士が疎遠になったり仲が悪くなることで、親同士の関係も悪化してしまう。それに対してママさんバレーボールでの付き合いは、子どもは関係なく参加者個人として参加しているため、そのようなことはないという。このような妻や母親としての立場ではなく個人として参加しているという特徴は、第 2 章 3 節の 2 項で説明した女縁理論に重なる部分が多い。

では、妻や母親としてではなく個人として参加しているママさんバレーボールの活動で、参加者たちはどのような会話をしているのかということについて見ていきたい。ママさんバレーボールのメンバーと普段どのような話をするのかという質問に対しては、以下のような回答が得られた。

T3 「どんなって言ってもくだらない話よ。でもバレーの話が多いかもしれない。」

T7 「反省会とかね。試合の。まあバレーの話が半分くらいだよ。」

T8 「どういう話。日常の愚痴も聞いてくれるし、嫁姑の文句とかも仲良しだからすごい聞いてくれる。あと、あそこが美味しかったよ、とか。」

筆者「情報交換ですか。」

T8 「そうそう、情報交換もできるし、家族とは全然違う話。」

T6 「チームでやるのも楽しいけど、チームでやることの難しさもある。」

筆者「チームでやることの楽しいことっていうのは、例えば。」

T6 「同じ年代の人がたくさんいるので、いろいろなことを知っている人がいて、
子どもの話も聞けたり。先輩お母さんから聞けたり。やっていてやっぱり
楽しいですね。」

チーム T では、バレーボールの話をしているという回答が多く見られた。バレーボールを介して集まっているコミュニティであるため、この回答は当然のこととうなずける。またバレーボールの話だけではなく、家族には言わない日常の愚痴や、おすすめの店についての情報交換も行っており、特に T6 の語りからは同じチーム内のメンバーに母親が多く、中には子育ての先輩もいるため子どもについての相談がされていることもわかる。「情報交換」や「子育ての悩み相談」はチーム P でも行われている。

筆者「お子さんの話が多いですか。」

P6 「そうですね、あと怪我することが多いので、どこの病院が良いか聞いたり。
病院は引っ越して来たらわからないから。」

筆者「そうですよね、特に不安ですよ。全然知らないところに行くなんて。」

P6 「そうなんです。情報教えてもらってる方が多いかなあ。」

P3 「やっぱり情報交換もできるし、子育てのそういう悩みとかも聞いてもらえたり、安心感をもらったりとか、そういう場でもある。家の中にいると、自分のところだけそうなんじゃないかってやっぱり思いがちなんだよね。例えば、言うこと聞かないとか、言ってもなんか口答えして、小さい時は特に癇癪を起こして物を投げたりとか。そういう暴力的なのがうちだけなんじゃないかってやっぱり思ってた。ここでバーって話すと、そういう場はどこでもあるんだろうけど、たまたま私はこのママさんバレーがすごい

う場であったっていう。で、聞いたらみんな『うちもだよー。』とか『あるよねー。』みたいな。」

筆者「それ結構心の支えじゃないですけど、楽になりますよね。」

P3 「そう。あと、その時の対処の仕方、『うちはこういう風に言ったら収まったとか。そういうやり方とかも参考にできることがあって、実践してみたらやっぱりうまくいくなあとか、私の家には合わないなっていう話もあるけど。」

筆者「じゃあすごい大事な場所ですね。」

P3 「そうだね。だからバレーボール以外の話は、終わったあととか始まる前に、したりとか。みんなそれぞれ、働いている人もいれば働いていない人もいたり、お子さんの学年が違ったりですごく面白い。参考になる。」

P6 の語りからは、ママさんバレーボールの活動をしていて困ることの 1 つであった怪我について、地元の良い病院を教えてもらうなどの情報交換が行われていることがわかる。また P3 が話しているように、主婦は子育てに関する悩みが自分の家庭だけだと思いこんでしまいがちであるため、同じ母親という立場であるメンバーに相談をしたりアドバイスをもらうことによってその悩みが解消するのである。これは主婦が集まっているコミュニティならではの回答だと考えられ、ママさんバレーボールに参加している主婦にとって非常に大きな意義であると言える。

さらにこれまで述べてきているように、ママさんバレーボールのチームは年齢層が幅広く参加者自身の年齢や子どもの年齢も様々である。その点については「自分が今まで知らなかった世界の話聞ける」「価値観が違う、違う考え方の話を聞ける」といった利点が挙げられており、参加者が様々な年齢のメンバーとコミュニケーションを取ることを楽しんでいることがわかる。

しかし、このように様々なメンバーが集まっていることの利点がある反面で、それによってチーム内で問題が起きることもある。

筆者「ママさんバレーをやっていて困ったことはありますか。」

T4 「ママさんで基本女ばかりで色んな歳の人がいて、色んな人がいるので。

2,3 年前までずっと 5 年くらいキャプテンやってたんですけど、まあ一応

この中で古いんでやってたんですけど。まとめるのが結構大変でしたね。今なんか人が結構（いて）、9人制バレーなんですけど、試合で2,3人余って、誰を出すかとか…。そりゃあ、練習来てるのに試合に出れるとか出れないとか。どこを優先すべきかみたいなのはやっぱり問題として今のキャンプテンもあるだろうし。それで文句が出たりもするので。」

筆者「そうですね。みなさん一生懸命やってらっしゃいますもんね。」

T4 「そうですね。練習は来てるのになんで出れないとか、練習来てないのになんで出れるのとか、そういう問題はやっぱり。色々なので、勝ちを目指すとか楽しいだけでやっていくかとか。」

筆者「チームとしてはどうですか。勝負を大事にするか、楽しいを重視するのか。」

T4 「最近ね、T3さんがコーチをいっぱい連れてきたり、大学生のコーチもすごい頑張っていて、すごくレベルが上がってきているので。9人制としてのバレーが、すごく上がってきているので。やっぱり勝ちたい。つくば市の大会でも勝ちたいし、市外行ってもやっぱり勝ちたいってなると、試合によって人を変えたりとか。コーチがその場にいればその人に従うんですけど。基本はまあ、両方ですよ。勝ちたいし、楽しくやりたいし。」

筆者「じゃあ、私は勝負とかじゃなくて楽しくやりたいんだって方もいらっしゃるんですか。」

T4 「そうですね。人によってやっぱり思うところが違うので。やっぱり練習はね、楽しくやりたいですけど、試合になったときにどこを目指すかっていう食い違いはやっぱり（ある）。」

筆者「ママさんバレーをやめたいと思ったことはありますか。」

T6 「それは、ある。」

筆者「それはどうしてですか。」

T6 「やっぱり人の関係かな。やっぱりね、あるよね。色々ね。」

筆者「じゃあ人間関係で。」

T6 「人間関係もあるし、怪我とか病気で弱気になる。でもバレーで良くなることもある。動いていればもやもやしていることも、汗かいたりみんなで動

いていけば。で、みんな何があっても結局次には持ち越さないようになってるから、いつまでもいつまでも引きずって、その人と喋らないってことはないから。」

筆者「ママさんバレーをされていて大変なことは、何が大変ですか。」

P9 「やっぱりみんな家庭があるので、メンバーを集めて試合に出たりするのが大変です。家庭の事情と、バレーの（バランスが）…。部活と違ってみんな勝ちたいとかでもないし。みんな当たり前のように大会に出るわけではなないので、その調整とか。」

筆者「そういうときはどうするんですか。」

P9 「今まさに悩んでいます。まあ、そこは難しいですね。なんか強要できないし。やっぱり家庭の事情もあるだろうし。」

T4、T6、P9 の語りからはチーム内で起こってしまう問題について読み取ることができる。参与者にはそれぞれの家庭の状況や仕事の有無、価値観の相違などがあるため、バレーボールに対するモチベーションや考え方にどうしても差が出てしまい、それによって人間関係のもつれが発生したり頭を悩ませる参与者もいる。チーム T においてもチーム P においても、メンバーのモチベーションの差はある。ママさんバレーボールは学校の部活動や学生のスポーツクラブとは異なり、結婚して子どもを抱えていえる参与者が大多数を占めるため、「まず家庭が第一」と考える参与者も多い。P9 が話しているように、ママさんバレーボールを優先するように強要することも不可能であり、どのようにしてメンバーのモチベーションをなるべく同じくらいに保つのか、楽しさを求めるメンバーと勝利を求めるメンバーのバランスを取るのか、ということが非常に難しい。ただ、T6 が話しているように、何か問題が発生してもその確執がずっと残るというわけではなく、その時々で話し合いをして解決はできているという。

以上の語りから、第 3 章第 2 節で説明したソーシャル・キャピタル論について考察する。ソーシャル・キャピタルは「信頼」「規範」「ネットワーク」の 3 要素で構成され、人と人との絆を重視する概念である。ママさんバレーボールのチーム内では、バレーボールや会話、外出などの交流を通して他の参与者への信頼が醸成されており、参与者はバレーボールによるチーム内外へのネットワークも獲得する。一方、チーム

内での役割分担は参与者たちの行動の規範となり得るが、規範に関連する語りは十分に得られたとは言えず、この点についてはさらなる調査が必要である。従ってママさんバレーボールによってソーシャル・キャピタルが形成されているかについて、現時点で明確な答えを出すことはできないが、ソーシャル・キャピタルのように人と人との絆によって作られるコミュニティが成立していることは確かであると言える。

6. 家族とママさんバレーボールの関わり

本章第4節で述べたように、ママさんバレーボールの活動はその空間に留まらず参与者の生活にも影響を与えている。しかしその影響は参与者に対してのみではなく、その家族にも及んでいた。本節では、ママさんバレーボール参与者の家族が、ママさんバレーボールとどのように関わっているのかということについて検討する。

ママさんバレーボールの参与者は全員主婦であるため、活動に参加するには家族の理解や協力が大きく関わってくる。以下は、参与者の家族のママさんバレーボールに対する態度についての語りである。

筆者「ママさんバレーに参加する上で何か障壁になるものとかありますか。」

T4 「昔はやっぱ、小さい頃は子どもがいて、置いて出てくるとか。障壁ってそういうことですね。」

筆者「あ、はい。そういうことです。」

T4 「そうですね。今はもう、全然放っておいても。今日は旦那は飲み会でいないんですけど、全然大丈夫。まあ、環境が恵まれていて隣に主人の親もいるので、置いてきているんですけど。小さいときはなんとなくこう、後ろめたいというか。」

筆者「そうですね、行って良いのかな、みたいなのはありますよね。」

T4 「そう、回数がやっぱ、私週1とかじゃなくて週2,3回あるので。やっぱり好き勝手にやってると、家族の手前っていうのが大きい。」

筆者「今はそういうのは特にないですか。」

T4 「うーん、でもしょっちゅう、本当に週に4,5回出ているときがあるので。」

筆者「それはバレーで、ですか。」

T4 「そう。そうすると『お前ばかり』みたいな、主人からは言われますけど。
子どもは全然、『行って行って』みたいな。自由になれるので。」

T6 「ママさんバレーに参加する上での障壁としては、パパですかね。基本的にはオッケーなんですけど、やっぱり試合が、11月に3回くらいあったんですよね。そういうの続くと、あんまりいい顔はしないから。」

筆者「毎週日曜とかですか。」

T6 「あったりするんですよ。そうするうち、今（子どもが）受験生なので、いろいろ。なければこう、自分がメインで休みを使えるけれどもやっぱり家のことと子どものことも。」

筆者「確かに。日曜日休みなのに…、ってことですね。」

T6 「そう。で、やっぱり預けてくるので。」

筆者「それをどうやって乗り越えるんでしょうか。」

T6 「いや、機嫌の良いときに、パパも自分の用事入れるから、そういう用事がありそうなときに、前の日とか何日か前に『（バレー）あるんだけど…、自分もあるでしょ。』みたいな。機嫌を見計らって。」

筆者「それで大会とか練習に出られないことはありますか？」

T6 「なんだろう、先月は3回あったけどやっぱり3回目はあんまりいい顔しなかったから、やめとこうかなみたいな。子どもの塾もあったので。」

T4は家の隣に夫の両親が住んでいるため、いざというときは子どもを預けることができ、「恵まれた環境だ」と話している。しかしそのような環境にありながらも、やはり家族を家に置いて夜間に外出することには後ろめたさもあり、ママさんバレーボールのための外出が週の大半の日を占めてしまうときは夫もよく思っていないと感じている。T6は、夫のママさんバレーボールに対する態度を非常に気にしている。土日に試合がありその日は家を空けるため、それが何度も続くと夫もあんまりいい顔をしていないという。夫も個人の予定があるときを見計らって話をするという工夫をしているが、それがうまくいかないときはママさんバレーボールの活動を欠席することもある。その一方で、P3は自身のママさんバレーボールの活動に対する家族の態度について、以下のように語っている。

筆者「ご家族は結構、P3さんがママさんバレーをすることに対しては協力的ですか。」

P3 「やっぱり、家でずっと籠っていると家の社会しか知らなくて、偏っちゃう。家の中ってやっぱり偏った考え方になりがちなのね。そういうのがあるし、やっぱりいきいきしてるって。」

筆者「なるほど、(バレーを) やってるほうが。そういうのはバレーをやる前からそうだったんですか。それともやってからですか。家族がそういう意見を持つようになったのは。」

P3 「うちの旦那は基本的には私が笑顔でいられるなら何やっても良いって人で、まあバレーをやってもそれはそれっていう感じで。それは、強いては自分に影響があるから。機嫌良くしてくれると、自分にも優しいから。自分が幸せにいたるために奥さんにはいつも機嫌良くしてもらったほうがっていう。」

P3 は自分がママさんバレーボールに参加することに対する家族の態度は協力的であると感じている。その理由としては、家族とパートの仕事以外に外に出る機会を設けることで偏った考えにならないように夫が配慮していることがある。これは、P3が好きなことをして機嫌が良いことが、自分が幸せに生活するために大切なことであるという、夫の考えからである。ママさんバレーボールに対する家族の態度については、頻繁に家を空けることに対してはあまりいい顔をしないが、参加者が外に出てバレーボールをすることでストレスを発散できるという点については、どの参加者も家族の理解はあると感じていることがわかった。また、参加者がママさんバレーボールで家を空けるために、試合の日の食事を夫が用意してくれたり、子どもが夜に一人で家にいる時間が長くないように仕事を早く切り上げて帰ってきてくれるといったような、夫の協力を得られているという話も散見された。

このような家族の理解や協力は、スポーツの実施に関連があるという話も聞かれた。

筆者「ご家族のママさんバレーに対する態度はどんな感じですか。」

P5 「うち旦那が柔道をやっていて、そういうのは理解ありますね。」

筆者「そうなんですね、今もやっているんですか。」

P5 「今はもうやってないですけど、やっぱりなんか体育会系だからそういう話
わかってくれるというか。」

筆者「ご家族のママさんバレーに対する態度とか、どんな感じですか。」

P7 「それはもう全然、運動してるってことでみんな協力的にしてくれますね。」

筆者「それはどうして、協力的になってくれるんだと思われますか。」

P7 「多分、身体動かして発散してるっていうのもあるんだと思うんだけど、う
ち家族みんながなんかスポーツをやっているの、だから運動すること自
体が全然協力的なので。」

P5 と P7 は、共に家族が別の場所でスポーツを実施しており、運動することに理解があると話している。自分自身がスポーツをしていると、スポーツを通して得られる経験やストレスを発散できることに価値を見出しており、そのことが参与者である主婦がママさんバレーボールに参加することに対して協力的になれる要因の 1 つであると考えられる。反対に、参与者がママさんバレーボールをしているのを見て、家族がスポーツを始めたという回答もあった。P6 は、自分がバレーボールを始めたことで娘もバレーボールを始め、バレーボールのつながりで「旦那さんでソフトボールをする人はいませんか」という呼びかけがあったことから、夫もソフトボールを始め、現在は家族全員がスポーツに目覚めたという。夫とは「この歳を過ぎてから夢中になれることがあるっていうのは良いことだね」という話をしており、家族としてスポーツに対して非常に前向きな感情を持っていると言える。さらに、P9 は自分がママさんバレーボールをしていることで、部活に入ってスポーツをしている子どもに「こういうときどうする？」というような相談をするなど、スポーツをしている者同士として対等に会話をすることが増えたと話している。

また、参与者の中にはママさんバレーボールと育児を両立するために、子どもを練習に連れてきている、あるいは連れてきていたと話す者もいる。

筆者「お子さんが結構小さいときに始められたというお話だったんですけど、育児との両立はどういう風にされてたんですか。」

T4 「初めの頃は、回数、頻度が少なかったもので、まだ小さいときは連れて行って。(バレーを) やったりとか。両立、まあそうですね。最初の頃は昼間だったので一緒に来ていたんですけど、まだ寝てる頃から初めたので。放置していて泣いたら、おっぱいあげたりとか、おむつ替えたりとか。」

筆者「そうなんですね。そういうことは他の方もあるんですか。」

T4 「あります。やっぱりママさんだと、ここはもう結構みんな(子どもが) 大きいんですけど、私がこっちに来た頃は結構みんな小さくて、みんな連れてきて遊ばせたりとか。」

筆者「じゃあ子ども同士が仲良いみたいな。」

T4 「そうですね、もう、知ってる感じですね。」

筆者「練習にお子さん連れて来たりとか、あまりなかったですか。」

P5 「夏休みとかはみんな連れてくるんで。同じ学年の子とかいるので、子どもたちはだんだん大きくなるとみんなで遊んだりするから、楽ですよ。試合のときとかも、連れて行けたら連れて行って、あの仲良い子に連絡して『連れて行くから』って言うとその子と一緒に遊んでるとか。そういうメリットはありますね。」

以上の T4 と P5 の語りからは、チーム T とチーム P のいずれのチームにおいても、練習に子どもを連れてくるということが頻繁に行われていることがわかる。子どもがまだ幼い頃には、ママさんバレーボールの最中でもおむつを替えたり授乳をするなど、母親としての仕事もこなしながらバレーボールをしていた。また、ママさんバレーボールに子どもを連れてくることで、他の参加者の子どもと遊ぶことができるなど、学校の友人とは異なる友人ができるということもある。この点については第2章第3節第2項で説明した高橋美波の研究のように、参加者が妻や母であるからこそできることの1つである。また以下の語りのように、子どもが成長してそれぞれの活動場所ができると、子どもの用事とママさんバレーボールの活動が重なってしまい、それが困ることがあると答えた参加者もいた。

筆者「ママさんバレーをされていて何か困ったことはありますか。」

P2 「困ったことは、そうだなあ。やっぱり時間のやりくりの中で子どもを優先しないといけないと、自分がやりたいこととどっちを優先すれば良いかっていうのはすごく悩むことがありますね。」

筆者「例えばどんなときがありますか。」

P2 「例えば、(バレーの) 試合が日曜日にあったら、でも子どもの下の子がサッカーをしていて、そっちの試合と重なっちゃったときとかは、自分のことも優先したいけど子どもも見てあげたい。」

筆者「ママさんバレーに参加する上で何か妨げになるようなものはありますか。」

P9 「子どもの習い事とか。だからまあ、サッカー少年団とか、子どもがやる大会とかの送迎ができなくなる。土日が被るから。」

筆者「送迎と重なったときはどうするんですか。」

P9 「夫に頼んだりとか。」

筆者「じゃあ結構妨げになるものはあったりするけど、何とかしてる。」

P9 「そう、でもやっぱり学校行事とかで人数揃わなくて大会に出られないとか、ある。」

筆者「お子さんの年齢が近いと、一緒になっちゃったとか？」

P9 「そうそうそう。」

筆者「同じ中学校とか。」

P9 「そうそう、あとは違う中学校だから、半分運動会とか。全員ダメだったら大体出ないんだけど、みたいな。」

筆者「なるほど、微妙な欠員ってことですね。」

幼い頃には母親と一緒に行動していた子どもも、成長していくにつれて学校や習い事などのそれぞれの活動場所ができる。P2 や P9 のように、ママさんバレーボールの参加者は自分がやりたいことと子どもの用事が重なってしまった際に、どちらを優先すべきか葛藤している。そのような時には、その子どもの用事がどれくらい重要なものなのかを考えて、優先しなくても良いと判断した際に、自分のバレーボールを優先するという。子どもの用事の中でも、子どもが習っているスポーツの大事な試合や、入試関係の用事など子どもの将来に関することが、重要だと判断されることがインタ

ビュー中の語りからわかっている。また P9 が話すように、子どもが同じ学校に通っていることや学年が近いことで、学校行事とママさんバレーボールの試合が重なってしまい、人数が揃わず試合に出られないこともあるという。

一方で、母親である参加者がママさんバレーボールをしている姿を見て、子どもに変化が表れたという話もあった。

P10 「私がこうやって一生懸命（バレーボールを）やっていると、子どもも『私もなんか好きなことしたい』っていうのが出てくるみたいで、それはそれで（良い）。」

この語りからは、P10 がママさんバレーボールに一生懸命取り組んでいる姿を見て、子どもも自分がしたいことを口に出して言うようになったというような、ママさんバレーボールを通して子どもを成長させることができたということが読み取れる。育児は母親と子どもが直接関わることによってのみなされるわけではなく、このように母親が自分のしたいことに一生懸命取り組んでいる姿が子どもにも影響を与えるという点が非常に興味深い。

7. ママさんバレーボール以外のコミュニティ

インタビュー調査では、ママさんバレーボール以外に主婦の集まりに参加しているかどうかについても尋ね、それぞれの集まりの特徴についても質問をした。本節では、ママさんバレーボールの参加者が、それ以外にどのような主婦のコミュニティに所属しているのかということについて、インタビュー中の語りを引用して記述する。

T4 は、ママさんバレーボール以外にも婦人のソフトボールチームにも所属している。

T4 「（筆者は）今はバレー部じゃないんですか。」

筆者「私はソフトボールをやってたんですよ。」

T4 「私も中学はソフトボール部だったんです。それで、土曜日 1 日だけ練習があって、そっちにも行ってるんですけど。」

筆者「別のチームのソフトボールですか。」

T4 「そうです、別のチームで。土曜日の昼間に。」

筆者「それはママさんのチームですか。」

T4 「うーん、まあそうですね、女子の。独身とかは構わないんですけど、女子のチームですね。」

筆者「それはどういう経緯で参加されたんですか。」

T4 「それは、幼稚園のママ友、子どもが幼稚園行っているときのママ友がやっていて、でなんかこうランチ会とかで、『中学の時やってた』って言ったら『ぜひ来てくれ！』って言われて。まあやる気なかったんですけど、両立で、バレーやってても良ければって。試合被っちゃうとバレーがやっぱり優先になっちゃうけど、それで良ければって言って参加したんです。」

家庭婦人のスポーツはバレーボール以外にもバスケットボールやソフトボール、サッカー、テニスなど様々な種類が存在する。T4 が所属しているチームは参加者を既婚女性に限定していないことから、家庭婦人のソフトボールであるかは判断できないが、いずれにしても主婦が集まってソフトボールをしているコミュニティに参加している。T4 の語りから、学生時代にソフトボールをやっていたことが参加する大きな要因となっていることがわかる。また、T4 はバレーボールの活動を優先することをソフトボールチームのメンバーにも伝えており、実際にチーム T のバレーボールの活動の方が週に 2 回と頻度が多いためチームのメンバーとの付き合いもチーム T の方が深いと語っている。

一方で、個人の旧友や近所のママさん同士の小規模の付き合いはあるけれども、忙しいためなかなかバレーボール以外の活動には参加していないという回答も多かった。

筆者「ママさんバレー以外に、ママさんや主婦さんの集まりに何か参加されていますか？」

T5 「してないです。」

筆者「参加しようとかはあんまり思わないんですか。」

T5 「好きなものだったら全然良いんですけど、すごい、いろいろ忙しい。仕事、バレー、子育てとかをやりくりしてまでやりたいものにはまだ、バレー以外にはないので、やっていないだけです。」

T5 の語りからは、家事・育児と仕事をこなしている主婦にとってはママさんバレーボールのための時間を作ることが精いっぱい、他のコミュニティに参加する余裕はあまりないということがわかる。特に、T5 のように「バレーボールが楽しくて満足している」ことが他のコミュニティへの参加意欲を抑制している要因として見られた。また、特殊な例ではあるが、以下のような回答もあった。

筆者「ママさんバレー以外にママさんとか主婦さんの集まりに、何か参加されていますか。」

T9 「そうですね。うち、旦那が外国人なのでその外国人のコミュニティみたいなものにはよく参加しています。」

筆者「それは、旦那さんに誘われて。」

T9 「逆に旦那が友達作れないタイプなので、そういうところに積極的に参加しに行ったり。」

筆者「T9 さんが『行こうよ!』という感じですか。」

T9 「そうそうそう、まあやっぱりそこに共通の友達が多いので、例えば片方が外国人、みたいな。なのでそういうところにはよく行きます。」

筆者「すごい、つくばならではの。それに参加していて何か良かったことはありますか。」

T9 「まあ共通の悩みも（共有できる）、国際結婚なので。あと、旦那の愚痴？あとはこういう日本人のコミュニティだと、どっちかがあぶれちゃうんですけど、そういうのがないんで。」

筆者「ここのバレーでする話と、そっちのコミュニティでする話は結構違う。」

T9 「違うと思います。」

T9 の場合は夫が外国人であり、日本人だけのコミュニティに参加していると夫が阻害されてしまうという課題を抱えているため、ママさんバレーボールとは別の、外国人が集まるコミュニティに参加している。また、そこでは T9 と同じように国際結婚をしている女性も多く、国際結婚ならではの悩みを相談し合い、ママさんバレーボールのチームでほかのメンバーとする話の内容とは異なる内容を交わしている。このよ

うに、ママさんバレーボールの参加者がママさんバレーボールとは別の目的や意義を感じて、他のコミュニティにも参加することがあることもインタビュー調査から読み取ることができる。

第5章 結論

ここまで、インタビュー調査の結果を5つのカテゴリーに分類して考察してきた。本節では、それらを最初に設定した3つの研究課題の視点で分析する。またチームTとチームPの違いについても、筆者が気づいた点を述べる。最後に全体をまとめて結論とする。

1. ママさんバレーボールへの参加による家事の改善

本節では、研究課題①の「ママさんバレーボールへの参加を通じた育児や家事の課題改善」の有無を問う。ママさんバレーボールの社会的役割を検討した際、事前調査では、コミュニティ内で主婦と他の同じ立場の参与者との交流が主婦の抱える課題を改善する可能性があると感じられた。チームには年齢や仕事の有無、子どもの年齢が異なる多様なメンバーが集まり、参与者たちはママさんバレーボールに参加することで、チーム内に留まらない交友関係へと広がっていた。他の参与者との交流の場は、練習や試合などのバレーボールのプレー時間に留まらず、食事会や他のイベントに加え、メンバーとのプライベートの外出と様々である。それら交流の場では、バレーボールに関することもあるが、子どもや家庭についての話が多くされている。チームの「先輩お母さん」に相談をしたり、自分の子どもより年上の子を抱えた年齢の近いメンバーと話をしたりしながら、我が家だけの悩みと思ってしまいがちな事情を共有し、共感してもらうことで、それらの悩みを抱えているのが自分だけではないという安心感を得ていたことがわかった。また、もらったアドバイスを実践したところ、悩んでいたことが好転したという発言も散見された。このように、ママさんバレーボールに参加することで獲得した交友関係の中で日常的に交わされる会話や情報交換は、主婦の育児や家事に対する不安感の軽減、あるいは実際に抱えている課題の改善につながることもわかった。

但し、こうした課題の改善は、メンバー同士の会話や情報交換によるサポートに限った結果ではないことも対話から浮かび上がった。参与者からは、自身が外に出てバレーボールをプレーする自由時間を得られているおかげで、夫や子どもに対して優しくなれるといった話や楽しみにしているバレーボールに行くために家事を早く終わら

せようという気持ちが芽生えるという発言もあり、ママさんバレーボールに参加することで自身の育児や家事へのモチベーションを向上させていたことを確認した。

こうしたポジティブな発言の一方、他方ではママさんバレーボールに参加することで育児や家事が妨げられることがあるという発言も提示された。また、複数の参加者が語っているように、ママさんバレーボールには怪我が付きまとう。怪我の程度は様々で、すぐ治るものから入院や手術が必要になるものまでであるが、怪我をすると家族に負担を与え、日常生活に悪影響を及ぼす場合もある。参加者の中には、学生時代の感覚で「まだまだ動けるだろう」と思って身体を動かして怪我をすると話す者もあり、主婦であるという立場も影響して、通常のパレーボール・クラブとは異なる特徴がみられた。

また、この他にも育児や家事の課題の改善・悪化とまでは言えないが、良い影響あるいは悪影響を及ぼす可能性のある例が見受けられた。良い影響を及ぼす例では、ママさんバレーボールの活動に子どもを連れてくることで、普段とは異なる子どもの交友関係ができること、参加者がママさんバレーボールに一生懸命取り組んでいる姿を見て子どもも自分がしたいことへの意欲が湧くこと、同じように部活動に所属してスポーツをしている子どもと対等な目線で話ができることなどを確認した。悪影響を及ぼす例としては、ママさんバレーボールの活動と子どもの予定が重なった際に時間のやりくりで悩み、チーム内での人間関係のトラブルや悩みが参加者のストレスになる恐れがあることなどが浮かび上がった。

以上を踏まえて研究課題①については、ママさんバレーボールへの参加は、他の参加者との交流を促進させ、自身のモチベーションを向上させることで、①育児や家事といった主婦特有の課題を改善する効果が期待できるものの、②スポーツ特有の怪我の発生によって日常生活に悪影響が出るなど、ママさんバレーボールの特異性を参加者が十分に自覚して取り組む必要性が示唆された。

2. 主婦の自由時間に対する家族の理解

研究課題②では、ママさんバレーボールに参加することで主婦の自由時間に対する家族の理解が深まるのかという問いを挙げた。インタビュー調査における「家族のママさんバレーボールに対する態度」について見てみると、子ども反対意見は少なく、むしろ母親が家を留守にする間、自分が自由になることを喜んでいる様子が受け取れ

た。その反面、夫に関しては、妻が週に何度も家を空けたり、一ヶ月に何度も試合で外出する週末があったりする場合には、あまり良い顔をしないという結果が出た。但し、「妻の機嫌が良いことが自分の幸せな生活につながる」という意見や、「妻が好きなことをやることに対して理解がある」という肯定的な意見も散見された。参加者によっては「週末の試合の日に1日家を留守にするときには家族の食事を用意してくれる」、「夜練習に出かける日に子どもが1人になる時間が長くないように仕事を早く切り上げて帰宅してくれる」といった夫のサポートが得られている場合もあった。

こうした家族の理解は、家族構成員のスポーツ経験と深く関係していた。参加者以外の家族構成員がスポーツ経験を有する場合、運動への参加に対する理解が高く、主婦のスポーツ参加に対しても協力的であるというケースが目立った。これは、第3章第3節で述べた高橋徹の理論に通じるもので、家族構成員が自身のスポーツ経験に置き換えて、スポーツを通して得られる成長プロセスや他者との協同経験、ストレス発散の効果などに価値を見出しているからだと推察される。

今回のインタビュー調査の結果から、主婦のママさんバレーボールへの参加がその家族に影響を及ぼしていることは間違いなさそうである。しかし、ママさんバレーボールに対する参加者家族の態度は様々であることから、今回のインタビュー調査の結果だけでは、ママさんバレーボールへの参加に限定した家族の理解や意識の変化を読み取ることができなかった。この研究課題に関しては、参加者である主婦への調査だけでは不十分であったことを研究の限界として示しておきたい。

3. スポーツを通じたコミュニティの特性

研究課題③は、「スポーツを通じて形成される主婦のコミュニティが、他のコミュニティと異なる性質を持つか？」という問いである。インタビューの語りからは、スポーツを通じたコミュニティ特有の作用であると考えられるものをいくつか読み取ることができた。本節ではそれぞれの要素を取り出して他のコミュニティの性質と比較しながら、研究課題③に対する答えを示す。

まず、スポーツコミュニティに参加している個人は、「拾えなかったボールが拾えるようになるのが楽しい」「勝てなかったチームに勝てるようになるのが嬉しい」など「できなかったことができるようになる」というスポーツ経験における成長プロセスに楽しみを見出していることが対話分析から伺えた。これはまさに「スポーツ経験の

教育的価値」と換言できよう。また、「学んで成長する」という視点から本現象を捉えると、これまで6人制バレーボールに触れてきた参加者たちが9人制バレーボールのルールやそこから派生する面白さを経験し、競技者としての自身に伸びしろを感じるという点も併記しておく必要がある。さらに、個人競技にも参加しているママさんバレーボール参加者は、「自分がミスしてもカバーしてもらったり、チームメイトがミスしたときに声を掛け合ったり、そういうものを得られる」と表現するなど、チームプレーに感じている魅力を語っている。この語りからは、バレーボールの実践で各参加者の動きが合わさってプレーが成り立つことから他者との協同経験が存在し、ママさんバレーボールの参加者がその協同経験に楽しさを感じていることを確認できた。バレーボール特有の「ボールを落とさずにつなぐ」という競技特性もこれらの点に大きく関係しているものと推察される。

以上の内容をまとめると、ママさんバレーボールを通じたコミュニティは、参加者に対してスポーツ経験を通して、自身の成長と他者との協同経験という価値を与えていると換言できる。

この性質を他の主婦が集まるコミュニティと比較してみると、まず華道や書道、料理教室などの習い事については、第3章第4節で考察した通り、参加者に対して自己の成長プロセスを提供することはできるが、一般的な方法で実施した場合、他者との協同経験を得ることは難しく、バレーボールを通じたコミュニティとは異なる。次に、PTA活動とママさんバレーボールなどのスポーツを通じた主婦のコミュニティの差異については、インタビュー調査結果から両者の絶対的な違いを見つけることができた。

ママさんバレーボールへの参加は自由な意志に基づいているのに対して、PTA活動はコミュニティの形成に参加者の子どもが関係しているという点で大きな違いがある。インタビュー調査では、PTA活動とママさんバレーボールの違いについて、PTAについては「子どもを介しての付き合いであるため、子ども同士の関係によって親同士の関係も変わる」と発言したのに対して、ママさんバレーボールについては「子どもが卒業しても続く関係」だと発言している。ママさんバレーボールが代表するスポーツを通じた主婦のコミュニティは、子どもや他の家族構成員に関連したコミュニティにあらず、自由な意志に基づいてバレーボールというスポーツを介して集まっているため、参加者個人が所属しているコミュニティだと言える。

さらに、スポーツを通じたコミュニティでは、参加者それぞれの行動によってスポ

ーツが成立しているという性質から、「自分はチームにとって必要な存在だ」という感情が芽生え易く、チームに対する帰属意識が高まり易いと考えられる。但し、スポーツの実践現場で語られる「同じ釜の飯を喰う仲間」という言説が同じ釜の飯を食わない人を排除する一面があるように、スポーツを通じて形成されるコミュニティはコミュニティ外の人を排除する可能性を含んでいる。また、ママさんバレーボールの大会規約は、かなり工夫されているものの、チームレベルでは勝敗を意識するあまり、試合への出場メンバーを決める際にトラブルが起きる危険性も有している。

以上の内容を含め研究課題③については、スポーツを通じて形成される主婦のコミュニティは、①参加者の自由な意思によって形成され、②スポーツによる個人の成長と他者との協同活動という価値を提供する特徴が他のコミュニティと異なる点であることがわかった。今回のインタビュー調査の対象が2チームに限定されているため、この特徴に関する普遍性については断言できないものの、調査対象チーム以外のスポーツを通じた主婦のコミュニティにおいても概ね共通していると予想される。また、③スポーツを通じたコミュニティは、チームへの帰属意識が高まる反面、チーム外の人を排除する可能性を含んでおり、④勝敗への過度な意識からコミュニティ内のトラブルが発生する危険性があるなど、消極的な側面もあると結論付けられた。

4. 調査対象の2つのチームの相違点

インタビュー調査の結果から、チームTとチームPの相違点がいくつか挙がった。2つのチームの最も大きな異なる点は、練習の時間であった。チームTは19時30分から22時と夜間であるのに対し、チームPは9時から13時と午前中に練習が行われていた。それぞれのチームに練習時間を尋ねると、両チームに共通して「チームのメンバーが集まれる時間にしている」という回答が返ってきた。また、チームTのメンバーの子どもの年齢を見てみると、大学生や20代など比較的年齢が高く、一方でチームPのメンバーの子どもの年齢は比較的低く、まだ幼い子どもを育てている参加者が多いことがわかった。さらに、チームTはフルタイムで働いているメンバーが多いのに対し、チームPは専業主婦やパート勤務のメンバーが殆どであった。

以上の結果から、チームTは子どもの年齢が高く夜間の外出がしやすく、フルタイム労働のメンバーが多いことから練習時間が夜間に設定され、チームPは子どもの年齢が低くパート勤務のメンバーが多いことから、子どもを送り出した後、帰ってくる

までの午前中が練習時間に設定されていたことが判明した。

また、インタビュー調査での「ママさんバレーボールでできた友人と普段どのような話をしているか」という質問に対して、チーム T はまず「バレーボールの話」、チーム P はまず「子どもの話」「情報交換」と回答する傾向が見られた。この傾向は、それぞれのチームのメンバーが置かれている状況を映しているものと考えられる。つまり、チーム T のメンバーは子育てが一段落した主婦が多く、他のメンバーとする会話もバレーボールが中心となるのに対し、チーム P のメンバーはまだまだ子育てに奮闘している主婦が多いために会話の内容も子どもに関するものが多くなる傾向が見られた。

このように、同じようにバレーボールというスポーツを通じて形成されているコミュニティであっても、そこに所属する参加者の状況によって全く性質が異なるということもわかった。

5. まとめにかえて

本節では、ママさんバレーボールを一つの枠組みとして、日本における家庭婦人スポーツの意義についてまとめたい。

まず先行研究の検討では、家庭婦人スポーツが当時の社会状況と密接な関連性を持って誕生していたことや、ママさんバレーボールの活動が主婦アイデンティティ形成に寄与していることを示した。次に、家庭婦人スポーツ参加者へのインタビュー調査からは、家庭婦人スポーツを通して参加者である主婦たちの育児や家事などにおける課題が改善され、家庭婦人スポーツの活動そのものが参加者の家族有益な影響を及ぼし、また家庭婦人スポーツのコミュニティが他の主婦によるコミュニティとは異なる魅力を有していることを明示した。さらに、こうした家庭婦人スポーツの肯定的な側面が存在する一方で、多様な参加者による価値観の不一致や勝敗にこだわるが故の関係性の亀裂というコミュニティ内における人間関係のトラブルの可能性についても言及した。

全ての事象には正負の両面が存在し、家庭婦人スポーツも例外ではない。しかし、本稿で明らかにされた家庭婦人スポーツの両面性を参加者等が自覚して活用すれば、少子化の原因の1つである子育てへの負担感や不安感を取り除く機能ばかりか、スポーツの持つ教育的効果や社会的効果によって女性たちの生活をより活力あるものにすに違いない。序論で述べたように日本では深刻な少子化が社会問題となっている。

この社会問題に対し、家庭婦人スポーツがよりよい形で活用されることを切に願い、まとめにかえたい。

最後に、本稿の課題を整理しておく。第一に、本稿ではママさんバレーボールに特化して家庭婦人スポーツの意義を考察した。序論で述べたように家庭婦人スポーツはバレーボールのみならず、テニスや卓球、バスケットボール、サッカー、ソフトボールなど様々な種類がある。また、それぞれの競技によってルールや競技特性が全く異なる。インタビュー調査ではバレーボールの競技特性についての語りも数多くみられそれらも分析対象とした。従って、競技特性の違いがそれぞれの家庭婦人スポーツの意義の違いにつながっている可能性がある。バレーボール以外の競技についても調査を行い、その競技特性も比較しながら、研究課題に対する一層の検討を要するだろう。第二に、本稿ではつくば市とさいたま市の2チーム合計19名にインタビュー調査を実施した。しかし本文中で述べたようにママさんバレーボールの競技者はこれよりはるかに多いため、調査で得られたデータの普遍性は保証できない。さらに調査対象の範囲を広げて考察を深めることが必要だろう。以上のことから、バレーボール以外の家庭婦人スポーツやママさんバレーボール内においても調査範囲を広げ、研究課題についてより深く考察することで、家庭婦人スポーツの可能性についてより厚く記述することを今後の目標としたい。

注

- (1) 文部科学省ホームページ「スポーツ基本計画」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm（2018/10/20 参照）より。
- (2) 総務省ホームページ「平成 29 年版情報通信白書」
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc141110.html>
（2018/08/01 参照）より。
- (3) 内閣府ホームページ「平成 29 年版少子化社会対策白書 第 1 章『少子化をめぐる現状』」
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2017/29pdfhonpen/pdf/s1-1.pdf>（2018/08/01 参照）より。
- (4) 厚生労働省ホームページ「少子化対策推進基本方針について」
https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/syousika/tp0816-2_18.html（2018/08/01 参照）より。
- (5) フェミニズム運動とは、女性の地位向上や解放を求める社会運動のことである。歴史的に 2 つの大きなフェミニズムの波が存在し、19 世紀末から第 1 次世界大戦までの波を「第 1 波フェミニズム」、1960 年代末から起こった波を「第 2 波フェミニズム」と呼ぶ。第 1 波フェミニズムはヨーロッパから始まり、女性の参政権などの権利を主張した。また第 2 波フェミニズムはアメリカで始まったウーマンリブ運動から派生し、固定性別役割分担に疑問を投げかけた[落合 2004:134-140]。
- (6) 一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟ホームページ「連盟について」
<http://www.mamasan-volley.jp/about/unei.html>（2018/11/16 参照）より。
- (7) アヴェリー・ブランテージは 1952 年から 1972 年の 20 年にかけて、IOC（国際オリンピック委員会）の会長を務めた。1887 年、アメリカのデトロイト生まれ。自身も陸上競技が専門のアスリートとして活躍。
「国際オリンピック委員会の百年 第 2 巻第 2 章」http://www.olympic-academy.jp/Diglib/IOC100/IOC100Years2_chapter2.pdf（2019/01/09 参照）より。
- (8) V リーグは、公益財団法人日本バレーボール協会の傘下団体である、一般社団法人日本バレーボールリーグ機構が運営する日本のプロバレーボールリーグである。

V1 リーグは、1998 年から 2006 年まで行われた日本のバレーボールリーグ戦である。

V リーグ公式ホームページ「V リーグについて」

<https://corp.vleague.or.jp/about/brief.php>（2019/01/09 参照）より。

- (9) 一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟ホームページ「大会情報・結果」

<http://www.mamasan-volley.jp/game/>（2018/11/16 参照）より。

- (10) 「吾妻」「手代木」「桜南」は、いずれもつくば市竹園地区の近隣に位置する地区の名称である。

- (11) 「ジモティー」は『地元 (jimoto)』と『y (～の性質などの意味)』をかけた名称で、近隣に住んでいる人同士が取引をできるインターネットサービス。各都道府県ごとのページがある。不要になった家具などの物品売買だけでなく、地域で募集されている仕事やイベントなどの情報も掲載されている。

<https://jmtty.jp/>（2019/01/11 参照）より。

参考文献

新井野洋一

- 2014 「地域活性化を目指すスポーツ事業の課題と展望」『地域政策学ジャーナル』
3(2): 1-13。

江刺正吾

- 1992 『女性スポーツの社会学』音羽印刷(株)。

林喜美子・湊久美子

- 1994 「家庭婦人が生涯スポーツ活動に長年に渡って参加できる要因」『和洋女子
大学紀要 家政系編』34: 61-78。

福田誉・上林功、古川拓也、間野義之、増山光洋

- 2017 「ママさんバレーボールにおけるスポーツ・コミットメントモデルの検討」
『バレーボール研究』19(1): 1-7。

木田悟・岩住希能

- 2007 「世代を超える社会的効果の意味」堀繁・木田悟・薄井充裕編『スポーツ
で地域をつくる』pp.115-129、東京大学出版会。

御園慎一郎・木田悟

- 2007 「地域のもつ力を活かすスポーツ」堀繁・木田悟・薄井充裕編『スポーツ
で地域をつくる』pp.49-74、東京大学出版会。

三好喬

- 1991 「コミュニティ・スポーツ—その意義・現状・展望—」三好喬監修『現代
コミュニティ・スポーツ論』pp.2-16、株式会社きょうせい。

内閣総理大臣官房広報室

- 1973 「婦人に関する意識調査〔第1分冊〕」内閣総理大臣官房広報室『世論調査
報告書 昭和47年10月調査』pp.112。
1984 「婦人に関する世論調査」内閣総理大臣官房広報室『世論調査報告概要 昭
和59年5月調査』pp.24。

中山正剛・田原亮二・小林勝法・神野賢治

- 2015 「育児期女性の運動・スポーツ実施に関する基礎的研究」『別府大学短期大学部紀要』34:67-76。

落合恵美子

- 2004 『21 世紀家族へ（第 3 版）』（株）有斐閣。

小倉和夫

- 2014 「開発と平和のためのスポーツの機能とその活用策」『Peace and culture』6(1): 157-165。

大原奈緒美

- 2014 「家庭婦人バレーボールにおける参加動機に関する一考察」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』(7): 59-63。

Robert J. Schinke and Stephanie J. Hanrahan

- 2012 Sport as a Possible Intervention : An Introduction. In Robert J Schinke and Stephanie J. Hanrahan (eds.), Sport for Development, Peace, and Social Justice, pp.1-7, West Virginia: Fitness Information Technology.

ロジェ・カイヨワ

- 1990 『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社。（Roger Caillois, 1958, *Les jeux et les hommes*. Paris : Gallimard.）

労働省婦人少年局編

- 1963 『婦人の現状（昭和 38 年版）』大蔵省印刷局。

高橋豪仁

- 1991 「コミュニティの発達とスポーツ」三好喬監修『現代コミュニティ・スポーツ論』pp.17-37、株式会社きょうせい。

高橋徹

- 2011 「スポーツの経験的価値についての検討—プラグマティズム思想における経験概念の議論から—」『体育・スポーツ哲学研究』33(2):91-105。

高橋美波

- 2012 「家庭婦人バレーボールの人類学的研究」『東北人類学教壇』11: 63-75。

高岡治子

- 2008 「家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産：ママさんバレーボールの発展過程と制度特性を中心に」『体育学研究』(53): 391-407。
- 2010 「主宰者機構からみた家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産：ママさんバレーボールを事例として」『体育学研究』(55): 525-538。

寺島貴美

- 2011 「第7回質的研究方法論：質的データを科学的に分析するために」『日本放射線技術学会誌』67(4):413-417。

上野千鶴子

- 2008 『「女縁」を生きた女たち』岩波現代文庫。

上野千鶴子・電通ネットワーク研究会

- 1988 『「女縁」が世の中を変える』日本経済新聞社。

内海和雄

- 2001 「『ママさんバレー』の実態と意義」『一橋論業』125(2): 115-131。

横山勝彦

- 2011 「スポーツとソーシャル・キャピタル」菊幸一・齋藤健司・真山達志・横山勝彦編『スポーツ政策論』pp.328-338、成文堂。

Summary

The possibilities of housewives' sports in Japan -In the case study of mothers' volleyball-

In March 2012, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology settled on The Sports Basic Plan with the aim of activating Japanese society through sports. And that plan includes promotion of sports activities according to life stage. Housewives' sports, which is unprecedented form of sports in the world, have been supporting Japanese women's sports according to their life stages. It is possible to say teams of housewives' sports are valuable communities for women except their homes and places of work, if members of the community can receive some supports for their nursing or housework through conversations and exchanging information among it.

This paper tries to make it clear the meaning of housewives' sports in Japanese society of today through reexamination of earlier researches and implemented semi-structured interviews. It is focused on participants of housewives' sports, and investigates how it works to them and how it exists in minds of them. Also, this paper focuses on mothers' volleyball which is called "mama-san volleyball", because it was born earliest among housewives' sports and holds the greatest number of participants as the pioneer of housewives' sports.

I implemented interview to 19 housewives who belong to teams in Tsukuba city and Saitama city. Before interviews I set three research questions. First, participants can improve their problems in their daily lives such as nursing and housework through joining to mothers' volleyball. Second, families of participants deepen their understanding of free time for housewives. And third, communities which is formed through sports have different features compared with communities which is not formed through sports, such as lessons of flower arrangement or calligraphy, and activities of PTA.

According to the results of interviews, I found out answers to these research questions. For the first one, participants can improve their problems through exchanges in the team. There are participants of all ages, so that it is easy to get useful information about their

problems. But sometimes mothers' volleyball disturbs them by causing injuries or troubles of relations among participants. For the second one, I found that there are some participants who are supported by their families to join practices of mothers' volleyball, and it affects to families' lives. But I could not find a definite answer because I did not interview to families and do not know how they think about mothers' volleyball. For the third one, I found that teams of mothers' volleyball are affected by educational and social effect of sports, and have different features compared with communities which is not formed through sports. However, it does not mean that the community always works well. There are positive side and negative side of communities though sports.

For these reasons, I it is possible to say that housewives' sports can be valuable community for women. However, I limit the research into the case of mothers' volleyball and cannot guarantee the universality. Housewives' sports are profound and well worth consideration.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、テーマの制定から執筆中のアドバイス、草稿の添削に至るまで支えてくださった関根久雄先生に心より感謝を申し上げたい。また、筆者は体育系の山口先生の研究室でもサブゼミ生として大変お世話になった。火がつくのが遅い筆者に対し丁寧にご指導くださった山口先生にも、お礼を申し上げたい。

そして何より、インタビュー調査に協力していただいた方々なしには本稿は執筆できなかった。つくば市のママさんバレーボールチームをご紹介いただいた体育系の中西康己先生、初対面にも関わらず調査をサポートしてくださった筑波大学女子バレーボール部の方々、さいたま市のママさんバレーボールチームを探している際、突然伺ったのにも関わらず快く情報提供してくださった浦和駒場体育館の職員の方々、さいたま市バレーボール協会会長の小林様、インタビュー調査に協力していただいたママさんバレーボール参加者の皆様のご協力があったこそ、本稿のタイトルにある「家庭婦人スポーツの可能性」について理解を深め、胸を張って提出できる卒業論文に仕上げることができた。

また、筑波大学で博士号を授与され、家庭婦人スポーツの社会学的研究を行っていらっしゃる高岡治子氏には、参考資料をご提供いただいた。苦勞して入手されたデータにも関わらず、見ず知らずの筆者に快く提供してくださった高岡氏にも最大限の謝意とその研究に対する尊敬の意を表する。

最後に、これまでの学生生活を支えてくださった両親に心より感謝申し上げ、謝辞としたい。